

清沢冽年譜(1890–1945)

松田義男編

改訂 2024年 5月 11日

2004年 10月 16日

本年譜作成にあたっては、橋川文三編『暗黒日記』(日本評論社、昭和54年)所収「仮年譜」(以下、橋川編「仮年譜」)、北岡伸一『清沢冽』(中央公論社、1987年、増補版2004年)を参照した。また、今後の補正のため典拠および補足事項を注記した。ただし、橋川編「仮年譜」、北岡伸一『清沢冽』、『暗黒日記』(1942年12月以後)に拠るものについては、原則として注記を省略した。清沢が遺した『スクラップブック』貼付記事によるものは、[SB貼付記事]と注記した。海外における行動については、ウェブ・サイトで公開されている、スタンフォード大学の「邦字新聞デジタル・コレクション」、ワシントン大学の「Nikkei Newspaper Digital Archive (日系新聞)」を参照した。

1890(明治23)年

2月8日、長野県南安曇野郡北穂高村に、父市弥、母たねの三男として誕生。

1903(明治36)年

3月、北穂高村小学校を卒業。

4月、研成義塾に入る¹。

12月20日、東穂高禁酒会に入会。

1906(明治39)年

3月、研成義塾卒業。

4月1日、同人誌『天籟』に「我研成義塾」を発表。

11月9日、『天籟』に「伝道につきて」を発表。

12月、渡米の途につく。

1907(明治40)年

1月10日、シアトル着。

5月15日、『天籟』に「米国通信」を発表。

この年、タコマ教会に寄付²。

1911(明治44)年

春頃、シアトルで発行されていた邦字新聞『北米時事』(主筆藤岡鉄雪)のタコマ(Tacoma)支社主任となる³。

『北米時事』では信濃太郎のペンネームで評論、評判をよぶ⁴。

1912(明治45・大正元)年

11月、ワシントン州の「小学校」でアメリカ大統領模擬選挙を経験⁵。

12月20日、地方視察等の用務でオレゴン州ポートランドを訪問⁶。

1913(大正 2)年

1月5日、同郷の有志とともに、シアトルで穂高倶楽部を結成。8日、母国訪問観光団に『北米時事』通信員として同行し、帰国の途につく。27日、横浜着⁷。

帰国中、早稲田大学に合格するが、事情あって入学を断念。

5月、帰米。

7月15日、穂高倶楽部機関誌『新故郷』に「日米の社会と其感想」を発表。

1914(大正 3)年

1月1日、『新故郷』に「日米問題の現状」を発表。

8月20日、『新故郷』に「日米の問題と其解決の途」を発表。

10月、サンフランシスコで発行されていた日刊邦字新聞『新世界』の記者となる⁸。

1915(大正 4)年

7月15日、植原悦二郎、河上清、千葉豊治等とともに、サンフランシスコ在住の邦字新聞記者団が会合を開き、排日問題の実相を故国に伝える手段として、故国の有力記者団を招聘することに決したとして、その趣意書を公表⁹。25日、『新世界』に「自づから立つ強き心 キリストに対する不満の一端を申上げる」を発表、超人間的存在への信仰を否定。

1916(大正 5)年

5月15日、サクラメント着¹⁰。18日、サクラメント付近の視察を終え、スタクトンに向け出発¹¹。20日、スタクトン着¹²。22日、フレズノ着、23日、フレズノ有志者による歓迎会に出席¹³。26日朝、ロサンジェルス着¹⁴。

1917(大正 6)年

10月19日、一週間の休暇を得てサンフランシスコを出発、シアトルに向かう¹⁵。

1918(大正 7)年

1月27日、サクラメント着。28日、スタクトンを経てサンフランシスコに帰る¹⁶。

7月23日、『新世界』が清沢の帰国を伝える¹⁷。27日、送別会に出席(於桑港倶楽部)¹⁸。31日、出帆¹⁹。

8月中旬、帰国。28日夜、井口喜源治を訪問²⁰。

この年、横浜の生糸輸出商菅川商会に入社²¹。

1919(大正 8)年

4月6日、菅川商会の仕事で渡米するため、横浜を出帆²²。船中で「如是我觀=我輩の日本土産 基督教主義を根本思想にせよ」を執筆し、『新世界』に寄稿(4月15～26日)。18日、シアトル着、20日、サンフランシスコ着(予定)²³。

5月24日、ロサンジェルス着²⁴。30日、ロサンジェルス発²⁵。

8月4日、サンフランシスコ総領事太田為吉から速達郵便で新世界社編集局内清沢宛に、領事館職務規則第5条(必要により日本臣民の本国送還を日本船舶の船長に命ずることができる)及び第12条(旅券を査証で

きる)による取調べの必要ありとして旅券の提出を公文書で通牒、翌5日、異例の通牒に対して、日米新聞社記者川島天涯、新世界記者大澤霞水と共に総領事館に出頭し、説明を求めるが総領事は拒否、6日、この間の経緯を『新世界』・新聞『日米』が公表²⁶、『新世界』は総領事が記者に対する私的感情により旅券査証・本国送還の威嚇的行為を行ったとして全面的に総領事批判を展開する²⁷。総領事の権力濫用に対して在留日本人の批判も高まるが事態の悪化を懸念した日本人会の有力者が動き、日本人会会長牛島謹爾が仲裁に入り、9日、総領事批判の矛を収める²⁸。24日、コルサに行く、25日、サンフランシスコに帰る²⁹。26日、『新世界』にコルサ視察報告が掲載³⁰。

10月27日、コレヤ丸にてサンフランシスコ出帆、欧米漫遊から帰国の後藤新平と同船³¹。

11月2日、ホノルル寄港、『布哇報知』の取材を受け³²、同日、横浜に向け出帆。

1920(大正9)年

6月29日、徴兵検査を受け「甲種合格」³³。

9月、中外商業新報社に入社³⁴。この頃、『新世界』の東京通信員となる(～1924年)³⁵。

10月、福井貞と結婚。

12月10日、松本歩兵連隊に入隊³⁶。

1921(大正10)年

1月8日、除隊³⁷。

この頃の住所は、横浜市尾上町6-90³⁸。

1922(大正11)年

5月、中外商業新報社の「通報部」と「業務部」を兼務していた³⁹。

11月頃、『中外商業新報』「青山椒」欄を担当する。

1923(大正12)年

1月30日、中外商業新報社を代表して、ソヴィエト・ロシアの代表ヨッフエを神戸に迎える⁴⁰。

4月10日、人種平等期成会発会式に列席、カリフォルニア州知事等への抗議を提議する(於帝国ホテル)⁴¹。

4月頃、日露国交問題について各界名士を対象とするアンケート調査を企画・実施し、5月1～14日、「当面の問題―日露の国交を何うする」と題して『中外商業新報』に掲載。

6月30日～7月2日、訪日していたロシアの外交官アドリフ・アブラーモヴィチ・ヨッフエへの公開状「ヨッフエ氏に問ふ」を『中外商業新報』に発表。

9月1日、関東大震災で妻・娘・義母・義妹を喪う⁴²。震災後は、神奈川県鶴見町豊岡に居住⁴³。

この頃、中外商業新報社の事実上の外報部長に就任⁴⁴。

11月6～9日、『新世界』に「震災と朝鮮人」を掲載。

12月25日、日本移民協会(会長添田寿一)の臨時総会に出席(於丸の内日本倶楽部)⁴⁵。

1924(大正13)年

2月、母たね、逝去⁴⁶。

3月5日、京浜間に居住する米国関係者が組織した日米倶楽部の会合に出席(於帝国ホテル)⁴⁷。

4月頃、叔父の葬儀のため帰郷⁴⁸。

5月24日、中外商業新報社主催経済大講演会で開会の趣旨に兼ねて経済界の大勢を概説(於県立諏訪蚕糸学

校講堂)⁴⁹。

- 6月15日、前橋市臨紅閣別館に於ける中外商業新報社主催「経済講演会」に出席、開会の挨拶およびアメリカ絹業協会代表者・前アメリカ大使館商務官 J.アボットの講演「The present economic outlook in Japan」の通訳を担当⁵⁰。24日頃、東京を立ち朝鮮・満州・中国視察旅行に向かう⁵¹。26日、朝鮮釜山で「脳味噌の廻転 朝鮮釜山にて」を執筆。釜山から京城に至り、京城から平壤・安東を経て奉天に至る。
- 7月2日、撫順炭坑を見学。3日「朝鮮及び満支旅行」を執筆。張作霖との会見を希望するが、会見はならず、奉天から長春に向かい、東支鉄道でハルビンに向かう。6日、「ハルビンに遊んで同胞の現状を観る」を執筆。「ハルビンに止まること三日」、急行列車で大連に至る。旅順の古戦場を訪い、翌日、大連から船で青島に向かう。青島で康有為と会見。青島から斉南に至る。斉南から天津に向かう列車で王正廷と乗り合わせる。天津で、黎元洪、段祺瑞、張孤、張伯苓と会見。天津から北京に至り、顔惠慶、王正廷、黄郛、北京大学総長蔣夢麟と会見。26日、王正廷を訪問し、北京議會を傍聴。27日、「支那議會を観る」を執筆。「北京に留まること約二週間」、北京から上海に向かう。車中で「見たままの支那」を執筆。上海に至り、唐紹儀と会見。「日本商人は後退すれど対支発展は多望」を執筆。上海から帰国の途に就く。
- 8月11日、神戸着⁵²。帰国後、中国要人との会見記「支那名士の印象」を『中外商業新報』（9月6～13、15～21日）に連載。
- 11月24日、千葉市で開かれた中外商業新報社主催「経済講演会」（松本丞治・植原悦二郎講演）に出席し開会の趣旨を述べる⁵³。

1925(大正 14)年

- 2月5日、田川大吉郎・田中都吉とともに、豊橋商業会議所主催・中外商業新報社後援の「経済講演会」に出席、「外人の眼に映じた経済の日本」と題して講演(於豊橋市東雲座)⁵⁴。6日、中外商業新報社主催「経済講演会」で「経済を第一義の問題とせよ」と題して講演(於名古屋市東雲座)⁵⁵。
- 3月6日、大山総領事を招いた米国関係者の晩餐会に出席(於末広)⁵⁶。
- 5月8日、中外商業新報主催忍町行田実業尚友会后援経済講演会に同行(於埼玉県忍町行田大正座劇場)⁵⁷。
- 6月、乾精末の紹介で国際連盟協会に入会⁵⁸。
- 9月4日、満鮮シベリア視察団に同行し、東京を出発(中外商業新報社からは外報部長清沢のほか、経済部長波津久清・営業部長若山武彦・営業部員柳沢政吉・経済部記者高木岩吉が同行)⁵⁹。7日、京城着。8日、朝鮮総督齋藤実と会見、京城日報社を訪問(同紙主筆丸山幹治)、平壤に向け出発。9日、平壤着。奉天に向け出発。10日、奉天着。13日、旅順に遊ぶ。14日、遼東新報社の歓迎会に出席。15日、ハルビンに向け出発。17日、ハルピン日本総領事館のレセプションに招かれる。21日、ハルビン出発。22日、ウラジオ着。23日、ウラジオを出帆。25日朝、敦賀着。26日朝、東京着⁶⁰。
- 10月9日、北京大使館参事官からスペインに公使として赴任する太田為吉、アメリカから帰国した牧師綱島佳吉とともに日米倶楽部主催の歓迎会に出席し挨拶⁶¹。
- 11月18日、『米国の研究』を日本評論社から刊行。

1926(大正 15・昭和元)年

- 2月7日、ラジオ放送「国際講話」で「戦争と平和」と題して講話⁶²。
- 5月7日、市政革新同盟主催の市政革新大演説会(於神田青年会館)に登壇予定⁶³。8日、国際連盟協会第6回通常総会に出席(於丸の内工業倶楽部)⁶⁴。23日、東京商業学校の国際連盟研究会発会式(於芝協栄会館)で「平和の勇士」と題して講演⁶⁵。
- 6月6日、小説『旋風』の作家・画家の集りに出席⁶⁶。
- 11月11日、国際連盟協会主催の国際連盟デー講演会で、司会者として「開会の辞」を述べる(於上野産業博覧会演芸館)⁶⁷。17日、国際連盟協会が組織した「地方的連盟協会研究会」に植原悦二郎、田川大吉郎等とともに出席(於丸の内中央亭)⁶⁸。

11月25日、『モダンガール』を金星堂から刊行。

12月2日、植原悦二郎の媒酌で源川綾子と結婚。11日、ラジオ放送(JOAK)の「趣味講座」で「職業としての結婚」と題して講演⁶⁹。

この頃、『北米時事』の東京通信員であった[典拠未詳]。

1927(昭和2)年

2月14日、中外商業新報社を退社。

東京朝日新聞社に入社(計画部次長)⁷⁰。荏原郡調布村鶴の木に転居⁷¹。

3月4日、国際連盟協会の「分盟問題調査会」に出席⁷²。22日、国際連盟協会から東京府西豊多摩郡青年団講習会に講師として派遣(於日本青年館)⁷³。

5月11日、国際連盟協会第7回総会に出席(於東京丸の内保険協会)⁷⁴。30日、『創造日本』の座談会「日本の政党政治の将来—政治座談会—」に出席(於東京会館)⁷⁵。

6月1日、国際連盟協会青山学院大学学生支部主催講演会に登壇、「支那の時局」と題して講演⁷⁶。

10月27日、長男瞭、誕生。

11月6日、東京朝日新聞社主催第六回女学生の会の講師(東京朝日新聞社計画部次長)として「婦人たるの特権」を講演(予定)⁷⁷。19日、国際連盟協会主催商科大学学生支部講演会に登壇⁷⁸。

1928(昭和3)年

1月1日(～12月1日)、『中央公論』の海外時評欄「海外近事」を無署名で連載。

?月、南安曇郡明盛村青年会の招きで講演⁷⁹。

4月15日、『黒潮に聴く』を万里閣書房から刊行。

5月20日、国際連盟協会中央大学学生支部主催講演会に登壇⁸⁰。

6月16日、国際連盟協会東洋大学学生支部発会式で講演⁸¹。

10月30日、国際連盟協会立教大学学生支部主催講演会に登壇⁸²。

この年、清沢が提案した『中央公論』常連執筆者の「二七会」が発足⁸³。

1929(昭和4)年

1月10日、『実業の世界』主催の「三宅雪嶺先生を繞りて中心人物に就ての座談会」に出席(於三宅雪嶺邸)⁸⁴。

3月4日、ラジオ放送(JOAK)で「けふ就任する米国大統領」と題して講演⁸⁵。15日、ラジオ放送(JOAK)の「子供の時間」で「シーザーの最後」について講演⁸⁶。

5月5日『自由日本を漁る』を千倉書房から刊行。13日、『自由日本を漁る』に収録した評論「甘粕と大杉の対話」が右翼系『やまと新聞』の攻撃を受ける⁸⁷。

7月18日、東京朝日新聞社を退職⁸⁸。

8月3日、中央公論社から中央公論社特派員として「米国の忌憚なき批評」を依頼され⁸⁹、渡米に際して送別会が催される(於丸の内東京会館)。10日、横浜出帆、シアトルに向かう⁹⁰。23日、シアトル着⁹¹。

この頃、新自由主義協会(新渡戸稲造会長、鶴見祐輔副会長)の評議員に就任⁹²。

9月3日、趣味の会が主催する漫談の夕に出席(於錦華楼)⁹³。4日、シアトル在住日系二世と懇談会(於日本人商業会議所)⁹⁴。10日、「母国を語る」と題して講演(於シアトル・日本館)⁹⁵。14日、北米時事主催第二回講演会で「農村日本と米国との比較」と題して講演(於テラー—国語学校)、16日、日会教育部主催講演会で「昭和日本の遠望」と題して講演(於国語学校ホール)⁹⁶。20日、オーバンの歓迎午餐会に出席し、北米時事社主催による講演会に招かれ講演⁹⁷。22日、有志晩餐会に招かれ(於ワシントン楼)、日本人青年会主催の講演会で「在米同胞と日本」と題して講演(於レッドマン講演会場)、ついでワパト日会堂で「農村日本と米国

- の比較」と題して講演。同夜スポケーンに向かい、23日、スポケーン市内近郊を見学、同市青年会主催の講演会で「在米同胞と日本」と題して講演(於レッドマン・ホール)⁹⁸。
- 10月6日、美以教会婦人会主催による講演会で「母としての女」と題して講演を予定(於美以教会会堂)⁹⁹。18日、『転換期の日本』を千倉書房から刊行。29日、サンフランシスコ着¹⁰⁰。
- 11月7日、サンフランシスコの知友主催の歓迎晩餐会に出席¹⁰¹。14日、サンフランシスコ日本人会講演部主催講演会で「故国の近状と米国」と題して講演(於金門学園ホール)¹⁰²、以後、サンフランシスコ近郊で講演(16日フレズノ、17日スタクトンでは「悲観の日本と楽観の米国」と題して、18日ウォールナツツグループ、19日アイルトン)¹⁰³。25日、マウンテンビューの日本人会主催講演会で講演(日本語学校)予定¹⁰⁴。28日、ロサンゼルスに赴く¹⁰⁵。
- 12月1日、ワシントン軍縮予備会議並にロンドン軍縮会議について、外務省当局の諒解を得て若槻全権一行に同行する清沢に、通信ならびに電報を日米新聞社が委嘱したことを発表¹⁰⁶。7日、羅府新報社主催の講演会で「転換期の日本」と題して講演(於西本願寺ホール)¹⁰⁷。12日、シアトル着。16日、若槻全権一行に同行しワシントン着。19日、ワシントン発、ニューヨーク着。21日、ニューヨーク発。27日ロンドン着。

1930(昭和5)年

- 1月6日、『巨人を語る』を三省堂から刊行。12日、次女英子誕生。21日、中外商業新報社のロンドン海軍軍縮会議(1月21日～4月22日)報道の特派員になる¹⁰⁸。
- 2月16日、マルクスの墓参。22日、マクドナルドの招待を受け会見。
- 3月4日、欧州大陸旅行に出発。5日、アムステルダムを出発、ベルリン着。11日、ブラハでベネシュ外相と会見。24日、ローマでローマ法王、ムッソリーニと会談。
- 4月3日、ロンドン着。12日、ロンドン発。20日、ニューヨーク着。
- 5月11日、馬場辰猪の墓参。24日、下院移民問題委員長アルバート・ジョンソン、上院外交委員会委員長ボラーにインタビュー取材¹⁰⁹。
- 6月1日、ニューヨーク出発、ナイヤガラを見物。2日、フォードと会見。3日、フォード工場を見学。4日、シカゴ着。15日、シカゴ発。19日、オグデン着、ユタ日本学園主催の講演会に臨み、21日、ロサンゼルスに向けて出発¹¹⁰。22日、ロサンゼルス着¹¹¹。27日、羅府日会および羅府新報社主催の講演会で「軍縮会議土産話」と題して講演¹¹²。30日、ロサンゼルスからサンフランシスコ着¹¹³。
- 7月2日、サンフランシスコで日米新聞社主催の講演会で講演(於リフォームド教会)¹¹⁴。11日、シアトルで講演。21日、ポートランドで講演。23日、ポートランドからサクラメント着、歓迎晩餐会に出席、日米新聞社サクラメント支社主催の講演会に臨む(於昭和ホール)¹¹⁵。24日、スタクトンで日米新聞社支社主催の講演会に臨む(於朝日座)¹¹⁶。25日、フローリンで講演(於フロリン日本人ホール)¹¹⁷。26日、フレズノでフレズノ郡青年会聯盟主催の講演会に臨み(於仏教会々堂)、27日、キングス郡日会主催の講演会に臨み(於ハンフォード仏教会堂)¹¹⁸、28日、キングス郡青年会主催の講演会に臨む(於ヴァイセリア日本人会館)¹¹⁹。29日、ローダイで講演(於楼亜会館)¹²⁰。30日、ヴァカビルで新世界・日米新聞両支社連合主催の講演会に臨む(於仏教会ホール)¹²¹。31日、サンノゼで日米新聞支社主催の講演会に臨む(於日本人ホール)¹²²。
- 8月1日、サリナス日本人会主催の講演会に臨む(於日本人ホール)¹²³。2日、ワッソビルで日米・新世界両新聞社支社主催の講演会で講演(於仏教会堂)¹²⁴。16日、オークランドで日会主催の講演会に臨む¹²⁵。18日、ロサンゼルス着¹²⁶。30日、産業組合・青年会主催の講演会で軍縮の裏面について講演(於ベニス学園)¹²⁷。
- 9月27日、ノーオーク青年会主催の軍縮問題に関する講演会で「軍縮会議と我国の将来」と題して講演(於ノーオーク・学園)、その後座談会に出席(於青年会館)¹²⁸。30日、ガタルーブ(ロサンゼルス)の青年団主催講演会でロンドン軍縮会議及び時局問題について講演(於青年団ホール)¹²⁹。
- 10月2日、羅府日会講演部主催講演会で「在留同胞の批判」と題して講演(於合同教会)¹³⁰。4日、ロサンゼルスを出帆、鈴木文治と同船、帰国の途につく¹³¹。20日、横浜着。
- 12月1日、『アメリカを裸体にす』を千倉書房から刊行。6日、国際連盟協会早稲田大学学生支部主催講演

会に登壇¹³²。

1931(昭和 6)年

- 1月28日、シアトル会に出席¹³³。
- 2月、信州埴科郡連合青年会の依頼で2日間の連続講演(於松代)¹³⁴。10日、ポートランド会に主賓として招待¹³⁵。
- 3月18日、『雄弁』の座談会「演説会風景」に出席(於東京丸ノ内常盤座)¹³⁶。
- 4月16日、翁久允等米国関係者五氏の送迎会に出席(於五反田松衆閣)¹³⁷。『報知新聞』の北太平洋横断飛行の準備と取材のため渡米。4月20日、『不安世界の大通り』を中央公論社から刊行。27日、バンクーバー着、2日ほど滞在し、シアトルに向かう¹³⁸。
- 5月2日、アラスカに向けシアトル出帆予定¹³⁹。20日、アラスカからシアトルに帰来¹⁴⁰。27日、サンフランシスコ着¹⁴¹。
- 6月15日、『フォード』を三省堂から刊行。16日、羅府新報社主催の座談会「日本を語る」に出席¹⁴²。29日、『北米時事』で「ぼくのコラム」を担当。
- 11月27日、シアトルからニューヨークに出発¹⁴³。

1932(昭和 7)年

- 1月10日、ワシントン日本大使館を訪問し、出渕大使に報知新聞社の太平洋横断飛行計画について種々の了解を求めた。
- 2月16日、鶴見裕輔の『母』の英文出版祝いの会に出席。18日、鶴見祐輔を訪問¹⁴⁴。
- 4月1日、太平洋横断試験飛行中に墜落死した(3月29日)陸軍航空兵大尉名越愛徳の告別式に参列(於ニューヨーク)¹⁴⁵。27日、飛行家吉原清治とともにロサンゼルス着¹⁴⁶。
- 5月14日、オークランドで日本人会主催の吉原飛行家に対する声援晩餐会に出席し挨拶¹⁴⁷。15日、日米新聞社主催の座談会「巴里を語るの会」に出席(於桑港加州ホテル社交室)¹⁴⁸。
- 7月14日、サンフランシスコを出帆¹⁴⁹、19日、ホノルルに寄港¹⁵⁰。月末に帰国¹⁵¹。
- 8月、満鉄夏期大学の講師として招かれる¹⁵²。27日、二七会の帰朝歓迎宴に出席¹⁵³。
- 10月8日、『アメリカは日本と戦はず』を千倉書房から刊行。29日、中外商業新報社主催『アメリカは日本と戦はず』の出版記念会に出席(於丸の内会館)。
- 11月2日、「大統領選挙を中心とする米国政治情勢」と題して講演(於中央大学)¹⁵⁴。10日、報知新聞社主催「日米問題講演会」で「大統領選挙の結果を批判す」と題して講演予定(於報知講堂)¹⁵⁵。
- 12月1日、沖野岩三郎、翁久允、岡本かの子等とともに出席した、座談会「外国から日本を見る」が『新潮』に掲載¹⁵⁶。17日、ポートランド会に出席。
- この年、報知新聞社論説委員に就任¹⁵⁷。

1933(昭和 8)年

- 1月21日、婦人時局問題研究会で「米国新大統領ルーズヴェルトと其政策」について講演¹⁵⁸。
- 2月1日、訳書『亜細亜モンロー主義』を千倉書房から刊行。10日、新自由主義協会本部主催の座談会に出席¹⁵⁹。
- 3月1日、『中央公論』に「内田外相に問ふ」を發表。18日、吉野作造を逗子に見舞う¹⁶⁰。23日、吉野作造追悼文「逝ける吉野作造氏 過去の、しかも新しい思想家」を『報知新聞』に發表。25日、『非常日本への直言』を千倉書房から刊行。30日、報知新聞社主催「満洲国を聞くの会」に同社論説委員として出席¹⁶¹。
- 4月10日、『中央公論』主催の「非常時後継内閣座談会」に出席(於丸ノ内会館)¹⁶²。12日、報知新聞社主催第3回家庭管理大学講座の講師(報知新聞社論説委員)として「最近思想問題評論」を講演予定¹⁶³。17日、日刊新

聞時代社主催外国新聞座談会に出席(於日比谷山水楼)¹⁶⁴。

5月1日、『中央公論』に「松岡全権に与ふ」を發表。12日、国際連盟協会第13回通常総会に出席(於生命保険協会)、日本の国際連盟脱退に伴い「国際連盟協会」を「日本国際協会」と名称変更することが提案され決定されたが、清沢は名称変更に反対した。総会後の晩餐会でテーブル・スピーチ¹⁶⁵。

6月15日、『東洋経済新報』主催の「日米親善問題座談会」に出席(於東洋経済新報社)¹⁶⁶。

8月26日、二七会に出席(於磯子借楽園)¹⁶⁷。30日、『婦人之友』の座談会「愛国及び愛人類を語る」に安部磯雄、石橋湛山等とともに出席(於婦人之友社ホール)¹⁶⁸。

11月19日、『革命期のアメリカ経済』を千倉書房から刊行。

12月9日、『東洋経済新報』の座談会「資本主義は倒壊するか？」に出席(於東洋経済新報社)¹⁶⁹。28日、『婦人之友』の座談会「国民外交を何うする」に出席(於婦人之友社ホール)¹⁷⁰。

この年、東京帝国大学学友会の招聘に応じ法学部大教室で講演、満員の盛況であった(文学部二年生であった学友会委員林健太郎の講演依頼によるものであった)¹⁷¹。

1934(昭和9)年

2月2日、『東洋経済新報』主催の「職業問題対策座談会 採用者の希望と就職者の心得を語る」に出席(於東洋経済新報社)¹⁷²。

4月14日、日本国際協会婦人部談話会で「最近の国際情勢」と題して講話¹⁷³。

5月18日、早稲田大学出版研究会主催の講演会で「現代ジャーナリズムの批判」と題して講演(於早稲田大学大隈講堂)¹⁷⁴。

6月23、24日、二七会の遠足で箱根仙石原に出かける¹⁷⁵。

7月6日、『東洋経済新報』主催の「岡田内閣」座談会 其の成立の意味と国民の要望を語る」に出席(於東洋経済新報社)¹⁷⁶。10日、『激動期に生く』を千倉書房から刊行。14日、日米学生会議発会式を傍聴(於日比谷公会堂)、16日、日米学生会議を傍聴(於青山学院教堂)¹⁷⁷。

8月2日(～10月13日)、中央公論社の全国巡回講演会の講師として全国を講演旅行(8月2日、和歌山で、3日、神戸で講演。4日、神戸六甲山に上る、6日、姫路から鳥取に赴き講演¹⁷⁸、8日、米子、9日、岡山、10日、高松、11日、松山、12日、呉、13日、広島、14日、山口、15日、門司、18日、福岡、19日、佐賀、20日、佐世保、21日、長崎、22日、熊本、23日、鹿児島、24日、宮崎、25日、大分、27日、京都、28日、奈良、29日、津で講演。30日、帰京)¹⁷⁹。

9月、前月に続き、全国講演旅行、10日、長岡、11日、新潟、12日、会津若松、13日、福島、14日、山梨、15日、秋田、ついで弘前、青森、函館を経て、19日、小樽、そして札幌を経て、24日、盛岡に立ち寄り、原敬の墓参り(於大慈寺)¹⁸⁰、26日帰京。29日、『婦人之友』の座談会「神経質」に出席(於婦人之友社ホール)¹⁸¹。

10月、前月に続き、全国講演旅行、2日、甲府、3日、静岡、4日、浜松、5日、豊岡、6日、名古屋、7日、岐阜、8日、福井、9日、金沢、10日、富山、11日、松本、12日、長野、13日、前橋で講演。22日、『経済情報』の座談会「臨時議会の諸問題と財政経済の前進」に出席(於東京丸の内会館)¹⁸²。25日、全日本巡回報告愛読者大会に講師として出席(於日本青年館)。

11月2日、『東洋経済新報』主催の「門戸開放座談会 日満経済ブロックとの関係」に出席(於東洋経済新報社)¹⁸³。27日、大日本文明協会創立25周年記念講演会で「アメリカ最近の傾向」と題して講演(於横浜開港記念会館)¹⁸⁴。

12月8日、『児童』主催の「貧困児童とその教育を語る座談会」に出席(於日比谷山水楼)¹⁸⁵。

1935(昭和10)年

1月12日、『混迷時代の生活態度』を千倉書房から刊行。15日、『台湾婦人界』および台湾愛国婦人界の招聘による講演旅行のため東京を出発。16日、台湾に向け出帆。19日、台湾(基隆)着¹⁸⁶。以後、台湾各地で

講演。

- 2月3日、基隆を出発。4日、アモイ着。5日、^{スフトウ}汕頭にて講演。6日、香港着。7日、広東着。8日、嶺南大学を訪問。李宗仁と会見。9日、留東同学会の招待会に出席¹⁸⁷。14日、基隆に到着。
- 3月2日、『経済往来』の座談会「今日及び明日を語る夕」に出席(於偕樂園)¹⁸⁸。15日、東亜同文会主講演会で「支那の対日真意を打診する」と題して講演(於霞山会館)¹⁸⁹。23日、日本国際協会大阪支部・大阪府立貿易館共催米国情勢講演会に登壇、「亜米利加最近の情勢」と題して講演(於大阪府実業会館大講堂)、夜、米国情勢懇談会に出席(於産業会館会議室)。29日、外交問題について外相広田弘毅にインタビュー(於外務省大臣室)¹⁹⁰。
- 4月10日、『文芸春秋』主催の「大学検討座談会」に出席(於芝公園なには家)¹⁹¹。
- 6月11日、東京帝国大学経友会主催討論会に河合栄治郎・藤沢親雄・戸坂潤とともに出席、「自由主義と其批判—自由主義の立場より—」と題して講演(於東京帝国大学講堂)¹⁹²。14日、『現代日本論』を千倉書房から刊行。15日、日本国際協会関東連合会で「太平洋と支那問題」と題して講演¹⁹³。
- 7月2日、「七月生れの偉人」をラジオ放送¹⁹⁴。27日、『東洋経済新報』の座談会「今週の経済界」に出席(於東洋経済新報社)¹⁹⁵。27～29日、日本国際協会主催「国際夏季大学」で講演(於埼玉県坂戸町尋常高等小学校)¹⁹⁶。
- 8月1～3日、日本国際協会主催「国際夏季大学」で講演(於千葉県東金町東金高等学校)¹⁹⁷。26日、『月刊ロシヤ』の座談会「各国とソ連邦の関係」に出席(於虎の門晩翠軒)¹⁹⁸。
- 9月14日、『東洋経済新報』の座談会「今週の経済界」に出席(於東洋経済新報社)¹⁹⁹。
- 10月5日、第6回ジャーナリスト講演会で「宇垣外交に就て—外交常識の問題—」と題して講演(於三田新館33番教室)²⁰⁰。10～11日、『東洋経済新報』の座談会「自由主義を語る」に出席(於東洋経済新報社)²⁰¹。
- 11月5日、『経済知識』主催の「深井総裁に話を訊く会」に出席(於帝国ホテル)²⁰²。19日、『世界再分割時代』を千倉書房から刊行。28日、『婦人之友』の座談会「良国民となるために 大国民となるために」に出席(於自由学園)²⁰³。

1936(昭和11)年

- 1月17日、『東洋経済新報』の座談会「軍縮会議脱退後の形勢と其の対策を語る」に出席(於東洋経済新報社楼上)²⁰⁴。20日、日本国際協会の午餐講話会に出席(鶴見裕輔講演)²⁰⁵。24日、『経済情報』の「総選挙に臨む 五政党の政策批判座談会」に出席(於丸の内会館)²⁰⁶。
- 2月12日、第19回衆議院議員総選挙(第4回普通選挙)に立候補した芦田均の応援で京都に行く(? 15日頃帰京)²⁰⁷。25日、文芸懇話会の座談会「文化と暴力」に出席²⁰⁸。
- 3月10日、『経済情報』の「新国是の提唱座談会」に出席(於神奈川県丸子・丸子園)²⁰⁹。23日、大阪府立貿易館・日本国際協会共催の米国情勢講演会で「アメリカ最近の情勢」と題して講演(於大阪府実業会館大講堂)²¹⁰。
- 4月6日、『文芸春秋』の座談会「官僚の抬頭を批判する」に出席(於芝公園なには家)²¹¹。
- 5月4日、『婦人之友』の座談会「新しき世代の家庭教育を語る」に出席(於南沢自由学園食堂)²¹²。30日、日本国際協会青山学院支部主催講演会で「植民地再分割と日本の前途」と題して講演(於青山学院)²¹³。
- 6月12日、東京講演会主催の「特別議会を通じて見た議会政治と庶政—新批判特別議会批判討論座談会」に出席(於経済倶楽部)²¹⁴。14日、日本国際協会横浜連合会主催公開講演会で「植民地再分割と日本」と題して講演(於朝日新聞横浜支局講堂)。
- 8月12日、日本国際協会主催夏季大学で「アメリカ最近の情勢」と題して講演(水戸市茨城会館)²¹⁵。26日、『フアツシヨは何故に生れたか(日本にフアツシヨは生れるか)』を東洋経済新報社から刊行。
- 10月20日、『時代・生活・思想』を千倉書房から刊行。
- 11月14日、大陸日報社主催座談会に出席(於東京銀座延寿春)²¹⁶。16日、『主婦之友』の「男の立場から恋愛と結婚を語る座談会」に出席(於帝国ホテル)²¹⁷。
- 12月15日、『東洋経済新報』の座談会「西安事変と支那の前途 我对支政策の転換を語る」に出席(於東洋経済

新報社楼上)²¹⁸。28日、『婦人之友』の座談会「「曖昧」を語る」に出席(於南沢自由学園)²¹⁹

1937(昭和12)年

- 2月4日、『東洋経済新報』主催の時局批判座談会「政変の意義と時局認識」に出席(於東洋経済新報社楼上)²²⁰。
- 3月8日、『改造』の座談会「戦争と軍備を語る」に出席(於東京会館)²²¹。
- 4月2日、『婦人之友』の座談会「東京を語る」に出席(於南沢自由学園)²²²。16日、『明日』の座談会「民族主義と無産運動」に出席(於日本労働会館)²²³。
- 5月8日、『中央公論』主催の「『次期政権』座談会」に出席(於偕楽園)²²⁴。24日、『世界知識』の座談会「ファツシヨは強いのか弱いのか」に出席(於陶々亭)²²⁵。27日、経済倶楽部定例午餐会で「世界思想家のソヴィエト批判の紹介」と題して講演。
- 6月4日、『東洋経済新報』の座談会「近衛内閣の成立を語る 成立の経過・意義及び其の前途」に出席(於東洋経済新報社楼上)²²⁶。
- 8月26日、『いのち』誌(生長の家)主催の座談会「第二次世界大戦は必至か？」に出席(於芝・春岱寮)²²⁷。
- 9月9日、日本国際協会主催国際特別問題研究会に出席²²⁸。11日、『ソ聯の現状とその批判』を東洋経済新報社から刊行。22日、二七会に出席(於白水)²²⁹。24日、国際ペン・クラブ理事会出席のため離日²³⁰。
- 10月1日、ホノルル着、『日布時事』の取材を受ける²³¹。8日、サンフランシスコ着、日米新聞社主催の講演会に登壇(於リフォード教会)²³²。9日、市内各英字新聞および通信社の極東関係記者・両邦字新聞記者らの懇談会に出席²³³。11日、ロサンジェルスにおいて羅府新報主催の講演会で「日支事変を繞りて」と題して講演(於西本願寺本院)²³⁴。17日、ワシントン着。19日、ニューヨーク着。21日、ニューヨーク発。28日、ロンドン着。
- 11月1日(～3日)、国際ペン・クラブ理事会のロンドン会議に出席²³⁵。6日、ブリュッセル着。9カ国条約会議取材²³⁶。16日ブリュッセル発。17日、ベルリン着。26日、ドイツ外務省新聞部長アシュマン博士と会見²³⁷。
- 12月10日、『ロンドン・タイムズ』紙に投稿掲載²³⁸、同日ワルシャワに向け出発。15日、ワルシャワ発、チェコを経由して、16日夜、ウイーン着。19日、ウイーン発、ブタペスト着。21日朝、ブタペスト発。22日、フローレンス着。23日、ローマ着。31日、ローマ発、夕方、ミラノ着。

1938(昭和13)年

- 1月1日、ミラノ発、ジュネーブ着。2日、ベルン着。公使官邸で芦田均と再会²³⁹。4日、パリ着。
- 2月4日、パリ発、ロンドン着。26日、『マンチェスター・ガーディアン』紙に投稿掲載²⁴⁰。
- 4月5日、『マンチェスター・ガーディアン』紙に投稿掲載²⁴¹。
- 5月11日、ロンドン発、パリ着。15日、パリ発、ベルリン着。18日、ベルリン発、ブラハ着。22～27日、ブラハの国際学術会議(International Studies Conference)に出席²⁴²。28日、ブラハ発。ベルグラード、アテネ、アレキサンドリア、カイロを歴訪。
- 6月8日、スエズから帰国の途につく。
- 7月1日、上海に寄港、『上海日報』の取材を受ける²⁴³。4日、神戸着²⁴⁴。15日、日本国際協会談話会(138回会合)で「欧州に於ける感想」と題して講話²⁴⁵。20日、自由学園に招かれ座談会に出席(於南沢)²⁴⁶。同月、日本外交協会第268回例会で「欧米は日本を如何に観て居るか」と題して講演²⁴⁷。
- 9月3日、日本国際協会国際問題特別研究会に出席²⁴⁸。8日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁴⁹。15日、日本国際協会特別調査部第24回委員会に出席(於丸ノ内日本倶楽部)²⁵⁰。23日、『東洋経済新報』の座談会「東進独逸の今後を語る」に出席(於東洋経済新報社楼上)²⁵¹。30日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁵²。
- 10月3日、「最近見て来た欧米婦人の印象」と題してラジオ講演²⁵³。5日、『ダイヤモンド』の座談会「欧州劇の内幕を語る」に出席(於レインボー・グリル)²⁵⁴。18日、日本国際協会特別調査部第25回例会に出席²⁵⁵。

11月4日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁵⁶。14～16日、石橋湛山とともに、大阪、神戸、京都で公開講演²⁵⁷。18日、東洋経済新報社主催「時局経済問題大講演会」で「支那事変と列強の動向」と題して講演(於日比谷公会堂)²⁵⁸。

12月2日、三木清・杉森孝次郎・室伏高信等と日本評論家協会を發起(發起人会於第一ホテル)²⁵⁹。8日、日本国際協会午餐談話会(有田外相就任祝賀会)に出席²⁶⁰。20日、『現代世界通信』を中央公論社から刊行。26日、『文芸春秋』の座談会「東亜に迫る世界の圧力」に出席(於星ヶ丘茶寮)²⁶¹。28日、日本放送協会海外放送で「一九三八年の日本の回顧」と題して英語講演(予定)²⁶²。31日～家族一同で年末年始を熱海で過ごす²⁶³。

この年、東洋経済新報社の顧問に就任²⁶⁴。

1939(昭和14)年

1月6日、『東洋経済新報』の座談会「平沼内閣の革新的性格を吟味する」に出席(於東洋経済新報社楼上)²⁶⁵。16日、日本国際協会特別調査部第28回例会に出席²⁶⁶。18日、「我が時局観と其解決策」と題して日比谷公会堂で講演²⁶⁷。

この頃、『報知新聞』論説委員を辞任する。

2月17日、日本国際協会特別調査部第29回例会に出席²⁶⁸。20日、『中外商業新報』の時評欄「中外週評」の執筆陣に加わる(～1942年2月23日)²⁶⁹。22日、「日本評論家協会」創立総会において常任委員に就任²⁷⁰。

3月2日、『科学知識』(科学知識普及協会)主催の「東亜新秩序建設座談会」に出席(於学士会館)²⁷¹。15日、日本国際協会特別調査部第30回例会に出席²⁷²。17日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁷³。30日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁷⁴。31日、日本国際協会主催午餐談話会に出席(於丸の内中央亭)²⁷⁵。

4月17日、『東洋経済新報』の座談会「戦争の危機と独伊進出の今後を語る」に出席(於東洋経済新報社楼上)²⁷⁶。24日、『週刊朝日』の座談会に出席(於東京藍水)²⁷⁷。

この頃、東洋経済新報社の囑託となる²⁷⁸。

5月8日、中央公論社社長嶋中雄作・三木清らとともに「国民学術協会」を結成(発会式於銀座Aワン)²⁷⁹。12日、日本国際協会主催国際問題特別研究会に出席(於丸の内中央亭)²⁸⁰。21日、井口喜源治追悼会に出席(於浅間温泉)²⁸¹。

6月19日、国際観光局が主催する「外国宣伝を語る座談会」に辰野隆・高柳賢三・蟬山政道・鶴見祐輔・芦田均らとともに出席(於丸の内会館)²⁸²。21日、日本国際協会午餐談話会に出席(於丸の内中央亭)²⁸³。28日、『東洋経済新報』の座談会「対支政策を再検討す」に出席(於東洋経済新報社楼上)²⁸⁴。23日、秋田魁新報社主催本紙改題五十周年記念講演会で「欧米を一巡して」と題して講演²⁸⁵。

7月3日、日本国際協会午餐談話会に出席(於丸の内中央亭)²⁸⁶。

8月1日、札幌経済倶楽部発会式で、石橋湛山とともに講演、2日、小樽の公開演説会で石橋湛山らと講演、3日、札幌の公開講演会で石橋湛山らと講演、4日、函館経済倶楽部発会式で石橋湛山らと講演²⁸⁷。5日、ハワイ向け英語放送で「日本の輿論はどこから生れるか」と題して講演(予定)²⁸⁸。

9月4日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁸⁹。11日、日本国際協会午餐談話会(第44回例会)に出席²⁹⁰。13日、火災保険倶楽部主催の講演会で「第二次大戦と国際情勢」と題して講演²⁹¹。『婦人之友』の座談会「世界新情勢の中に立つ」に出席(於目白・明日館)²⁹²。28日、『雄弁』の「欧州大戦の表裏を語る座談会」に出席(於偕楽園)²⁹³。

10月5日、日本橋倶楽部で「欧州大戦の動向と事変の收拾」と題して講演²⁹⁴。9日、中央公論社主催の座談会「外務省と日本外交」に出席(於星ヶ岡茶寮)²⁹⁵。23日、『大陸』の座談会「雨か?風か?暗雲低迷する日米関係を語る」に出席(於晩翠館)²⁹⁶。

11月17日、国際関係研究会発会式・第1回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)²⁹⁷。

12月12日、日本国際協会午餐談話会に出席²⁹⁸。馬場恒吾、石橋湛山を伴って前駐英大使吉田茂の自邸を訪問²⁹⁹。18日、国際関係研究会第2回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)³⁰⁰。21日、日本国際協会主催午餐談話会(第160回例会)に出席(於丸の内中央亭)³⁰¹。22日、丁西倫理会研究会で「最近のヨーロッパ

戦争の状況に就いて」と題して講演³⁰²。26日、料亭光悦に吉田茂を招く³⁰³。

1940(昭和15)年

- 1月20日、国際関係研究会第3回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)³⁰⁴、石橋湛山、蟬山政道、上田貞次郎らと新研究題目 **International Organization** について協議³⁰⁵。22日、日本国際協会午餐談話会に出席³⁰⁶。『ダイヤモンド』の座談会「経済情勢と新内閣」に出席³⁰⁷。
- 2月1日、『実業之日本』主催で芦田均と対談(於丸の内会館)³⁰⁸。8日、50歳の誕生日を記念して植原悦二郎等を歌舞伎座に招待³⁰⁹。12日、国際関係研究会第4回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)³¹⁰。
- 3月18日、国際関係研究会第5回研究例会で「米国の欧州戦争並に平和回復に関する動向」と題して報告(於東洋経済新報社楼上)³¹¹。29日、『東洋経済新報』の座談会「新政権成立後の重要問題」に出席³¹²。
- 4月10日、『婦人之友』の座談会「この頃の問題を語る」に出席(於南沢・自由学園)³¹³。17日、国際関係研究会第6回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)³¹⁴。18日、『アメリカ』の座談会「対米政策を語る」に出席(於エー・ワン)³¹⁵。20日、『第二次欧州大戦の研究』を東洋経済新報社から刊行。
- 5月22日、『週刊朝日』主催の「欧州戦乱座談会」に出席(於藍水)³¹⁶。29日、日本国際協会午餐談話会に出席³¹⁷。
- 6月4日、『公論』の座談会「欧州戦局の実状と今後の日本」に出席(於赤坂くぼた)³¹⁸。8日、『インダストリー』の座談会「激変する世界経済と統制経済の前途」に出席(於A・ワン)³¹⁹。28日、『実業之日本』の座談会「近衛公と新党を語る」に出席(於工業クラブ)³²⁰。この頃、日本外交史年表の作成に着手。
- 夏、朝鮮・満州を旅行。満鉄興亜大学(7月31日～8月5日)に講師として招聘され、7月31日、8月1、2日、「国際関係より見たる日本の地位と来るべき世界新秩序」と題して講演(於奉天・萩町記念会館)³²¹。
- 8月5日、満鉄興亜大学の講師として講演(於新京満鉄学生会館)、講演後『満州日日新聞』の取材を受ける³²²。14日、ロシア・ファシスト党の書記長 K.B.ロザエフスキーとの懇談会に田沢義輔とともに出席(於ハルビン・ヤマトホテル)³²³。
- 9月30日、日本国際協会午餐談話会に出席³²⁴。
- 10月7日、『公論』の座談会「国際新情勢と海洋国防国家」に出席(於学士会館)³²⁵。8日、国際関係研究会第8回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)³²⁶。12日、国際関係研究会臨時理事会に出席³²⁷。
- 11月6日、日本国際協会午餐談話会に出席³²⁸。24日夜、名古屋着、25日、『名古屋新聞』の取材を受ける³²⁹。
- 12月16日、国際関係研究会第9回研究例会に出席(於東洋経済新報社楼上)³³⁰。18日、『名古屋新聞』の座談会「日米もし戦はゞ」に出席(於星ヶ丘茶寮)³³¹。

1941(昭和16)年

- 1月27日、二七会に出席³³²。30日、日本講演通信社主催の「太平洋を繞る日・米・蘇関係鼎談会」に出席³³³。
- 2月17日、日本国際協会午餐談話会に出席³³⁴。26日、内閣情報局が主宰する雑誌編集者の定例懇談会で、馬場恒吾等とともに禁止執筆者として内示される³³⁵。
- 3月5日、『インダストリー』の座談会「欧州戦局と極東状況の見透し」に出席³³⁶。13日、東洋経済新報社の評議員に嘱任(顧問兼編集局並研究部嘱託)³³⁷。
- 5月2日、経済倶楽部で「日本外交の特質」と題して講演³³⁸。7日、『インダストリー』の鼎談会「和平か長期戦か 欧州戦争の見透し」に出席³³⁹。23日、日本国際協会午餐談話会(第250回例会)に出席³⁴⁰。
- 6月21日、『外交史』を東洋経済新報社出版部から刊行。23日、日本国際協会午餐談話会(第257回例会)に出席³⁴¹。25日、『東洋経済新報』の座談会「独ソ開戦の後に来るもの」に出席(於東洋経済新報社楼上)³⁴²。
- 8月4日、『中外商業新報』に「近衛首相に呈す」を発表。29日、日本国際協会午餐談話会(第266回例会)に出席³⁴³。
- 9月1日、『中外商業新報』に「豊田外相に与ふ」を発表。17日、『インダストリー』の座談会「独米危機を孕む世界動乱の展開」に出席³⁴⁴。

11月8日、日本国際協会午餐談話会(第274回例会)に出席³⁴⁵。

12月8日夜、国民学術協会評議員会に出席、桑木敏翼、穂積重遠、松本蒸治、牧野英一、東畑精一、三木清、正宗白鳥等が参加³⁴⁶。

1942(昭和17)年

2月14日、国民学術協会国語問題研究会の座談会「日本語の海外進出について」に出席³⁴⁷。

3月23日、新潟郵便局主催「講演と歌唱指導の夕」に講師として招聘され講演(於新潟市公会堂)³⁴⁸。

5月10日、『外政家としての大久保利通』を中央公論社から刊行。

9月20日、『日本外交史』上・下巻を東洋経済新報社出版部から刊行。

10月頃、通信省の委嘱により山陰地方で巡講³⁴⁹。

11月3日、岩波書店創業三十周年祝賀の会に出席(於大東亜会館)³⁵⁰。

12月9日、「戦時日記」の執筆を始める。12日、外交年鑑編集会議に出席。15日、東洋経済新報社の評議員会に出席。26日、二六会(小林会)に出席。28日、年表相談会に出席。

1943(昭和18)年

1月12日、国民学術協会例会に出席。14日、東京市主催常会指導者練成講習会五十回記念に招待。16日、経済倶楽部(大内正敏談)に出席。

2月10日、国際関係研究会例会(中島健蔵「マレイ報告」談)に出席。

3月22日、外交年鑑の会合(竹内克己主催)に出席。23日、通信省および経済倶楽部の講演のため東京を出発。

4月4日、四国(松山・高知・徳島・高松)の講演旅行を終えて帰京。

5月5日頃、軽井沢に赴く。11日頃、帰京。25日、国際関係研究会に出席。

6月?日～11日、大阪(池田市)、神戸、名古屋、京都を講演旅行。23日、明治学院で講演。27日、国際関係研究会例会(石橋湛山講演)に出席、夜、二六会に出席。29日、軽井沢に赴く。

7月8日、帰京、芦田均主催の正木呉を中心にする会に出席。9日、国民学術協会例会に出席。17日、幹事役として二七会を主催。20日、軽井沢に赴く。26日、帰京。29日、軽井沢に赴く。

8月9日、通信省の依頼により、福島・仙台・米沢・山形を巡回講演、15日、軽井沢に戻る。30日、帰京、東洋経済新報社の評議員会に出席。31日、島崎藤村の遺族を訪問。

9月6日、東洋経済新報社の評議員会に出席。11日、国民学術協会意に出席。13日、国際関係研究会例会に出席。15日、軽井沢に赴く。27日、帰京、東洋経済新報社の評議員会に出席し、夜、二六会に出席。28日、日本外政協会午餐談話会(第324回例会)に出席(加瀬俊一講演)³⁵¹。

10月1日、国民学術協会例会に出席。4日、東洋経済新報社の評議員会に出席。5日、日本外政協会午餐談話会(第325回例会、井口調査官談話)に出席³⁵²。6日、日本倶楽部の講演会(小田島大佐講演)に出席。8日、経済倶楽部講演会(太田三郎講演)に出席。9日、講演会(信夫淳平、金田一京助講演)に出席。10日、結婚式出席。11日、東洋経済新報社の評議員会に出席。12日、有田八郎告別式に出席。20日、軽井沢に赴く。26日、上京、二六会に出席。28日、東京都の講演会に赴く。晩、ペン倶楽部理事会に出席。29日、国際関係研究会に出席。

11月1日、東洋経済新報社の評議員会に出席。晩、国民学術協会の理事会に出席。5日、経済倶楽部講演会(嶺山政道講演)に出席。9日、国民学術協会例会に出席。13日、保険協会で講演。16日、講演のため東京を出発、福島で講演。17日、横手で講演。18日、秋田市で講演。19日、新潟で講演。20日、軽井沢に戻る。24日、帰京。25日、青木大東亜相との会食に招かれる。29日、東洋経済新報社の評議員会に出席。

12月9日、国民学術協会例会(仁科芳雄講演)に出席。17日、国際関係研究会(三浦新七講演)に出席。20日、日本新聞会の主催で、阿部真之助と対談³⁵³。24日、二六会に出席。28日、「日本外交史研究会」の設立趣意書を執筆。

1944(昭和 19)年

- 1月1日、熱海に赴く。6日、帰京。7日、経済倶楽部講演会(石橋湛山講演)に出席。10日、東洋経済新報社の評議員会に出席。11日、国民学術協会例会に出席。17日、東洋経済新報社の評議員会に出席。20日、日本外政協会午餐談話会(牛場信彦講演)に出席³⁵⁴。21日、経済倶楽部講演会に出席(太田三郎講演)。24日、東洋経済新報社の評議員会に出席。26日、二六会に出席。28日、『オリエンタル・エコノミスト』の会合に出席。28日、旧『報知新聞』論説委員の会に出席。31日、東洋経済新報社の評議員会に出席。
- 2月1日、国民学術協会に出席。3日、箱根に赴く。9日、国民学術協会で講演。12日、『オリエンタル・エコノミスト』主催の会食に出席。19日、運輸通運省通信院(旧通信省)の委嘱により権太・北海道を巡講するため、東京を出発。20日、函館着、講演会に列席。21日、小樽経済倶楽部で講演。23日、札幌通信局で講演。24日、旭川で講演。25日、稚内で講演。大泊を経て敷香着。27日、敷香郵便局で講演。28日、豊原で講演、王子製紙倶楽部にて座談会に出席。29日、大泊で講演。
- 3月1日、稚内着。3日、札幌で講演。4日、苫小牧着、座談会に出席。6日、函館着。7日、帰京。13日、東洋経済新報社の評議員会に出席。20日、東洋経済新報社の評議員会に出席。22日、国民学術協会評議員会に出席。24日、日本外政協会(佐々木克己講演「最近の戦況」)に出席³⁵⁵。27日、東洋経済新報社の評議員会に出席。
- この頃、外務省の対外宣伝計画(対外宣伝向け評論を高柳賢三、上田辰之助とともに執筆し、Japonicusの署名で『The Nippon Times』に掲載する計画)に参加³⁵⁶。
- 4月3～5日、Japonicus 署名の「Five propaganda masterpieces」が、25～27日、「Too large and too small a world」が『The Nippon Times』に掲載される。
- 5月1日、東洋経済新報社の評議員会に出席。晩、国民学術協会理事会に出席。5日、経済財倶楽部講演会に出席(小田島薫講演)。7日、軽井沢に赴く。16日、帰京。17日、国際関係研究会(山田芳太郎講演)に出席。20日、経済倶楽部中央会の評議員会に出席。27日、経済倶楽部講演のため、東京を出発。28日、下関着。29日、講演。30日、博多着、講演。以後、長崎、鹿児島、宮崎などで講演。
- 6月11日、横浜着。13日、三浦鉄太郎著『世界転換史』出版祝賀会に出席。14日、国際関係研究会(高橋亀吉講演)に出席。19日、東洋経済新報社の評議員会に出席。20日、経済倶楽部中央会の会合に出席。26日、東洋経済新報社の評議員会に出席。27日、国際関係研究会(鶴見裕輔講演)に出席。29日、『オリエンタル・エコノミスト』編輯会議に出席。
- 7月3日、軽井沢に赴く。10日、帰京、東洋経済新報社の評議員会に出席。晩、国民学術協会に出席(於大東亜会館)。13日、国際関係研究会(太田三郎講演)に出席。17日、東洋経済新報社の評議員会に出席。24日、東洋経済新報社の評議員会に出席。28日、『オリエンタル・エコノミスト』編輯会議に出席。
- 8月2日、軽井沢に赴く。14日、帰京、東洋経済新報社の評議員会に出席。15日、外政協会(安東義良講演)に出席。21日、東洋経済新報社の評議員会に出席。28日、東洋経済新報社の評議員会に出席。29日、外務省囑託。
- 9月3日、軽井沢に赴く。12日、帰京、経済倶楽部中央会(津島寿一講演)に出席。13日、国民学術協会に出席。26日、『オリエンタル・エコノミスト』の会議に出席、晩、国際関係研究会に出席。28日、自由学園男子部学生卒業式に出席。29日、国際関係研究会(横田喜三郎講演)に出席。
- 10月2日、国民学術協会に出席。3日、石橋湛山主催の大内兵衛ら共産党事件被告の無罪判決を祝う晩餐会に出席。4日、『東洋経済新報』の座談会「国民運動の指針を語る」に出席³⁵⁷。7日、東京都主催の指導員養成の講演会で講演。8日、新宿発、松本着。11日、帰京。12日、国際関係研究会に出席。21日、国際関係研究会(上田辰之助講演)に出席。25日、啓明学園で講演。26日、足利経済倶楽部で講演。28日、国際関係研究会に出席。29日、千葉豊治追悼会を主催。30日、東京都の依頼により三鷹の常会で講演。
- 11月6日、東洋経済新報社の評議員会に出席。7日、青梅で講演。9日、国民学術協会(杉森孝次郎講演)に出席。13日、東洋経済新報社の評議員会に出席。14日、国際関係研究会(加納久朗講演)に出席。15日午後、東洋経済 50 周年記念会に出席。18日、東京都の依頼により世田谷区役所で講演。20日、東洋経済新報社の評議員会に出席。22日、東京都の依頼により世田谷区役所で講演。25日、『大陸東洋経済』の座談会「反枢軸国の戦後機構案を批判す」に出席³⁵⁸。28日、東京都の依頼により小木曾村で講演。29日、国際

関係研究会(柳沢健講演)に出席。

12月1日、『オリエンタル・エコノミスト』編輯会議に出席。4日、東洋経済新報社の評議員会に出席。5日、日本外交史研究所発会式に出席し挨拶。9日、国民学術協会に出席。11日、東洋経済新報社の評議員会に出席。18日、東洋経済新報社の評議員会に出席。19日、日本外交史研究所例会(幣原喜重郎講演)に出席。26日、国際関係研究会(石橋湛山講演)に出席。

1945(昭和 20)年

1月8日、東洋経済新報社の評議員会に出席。13日、国民学術協会例会に出席。14日、片岡鉄平の告別式に出席。15日、東洋経済新報社の評議員会に出席。18日、第3回日本外交史研究会(幣原喜重郎講演)に出席。

2月9日、国民学術協会例会に出席(津田左右吉講演)。12日、東洋経済新報社の評議員会に出席。15日、ノー・サーベール会に出席(於料亭嵯峨野)。19日、東洋経済新報社の評議員会に出席。

3月9日、通信院貯金課の依頼により前橋で講演。12日、東洋経済新報社の評議員会に出席³⁵⁹。19日、東洋経済新報社の評議員会に出席。24日夜、新宿発、翌25日朝、松本着。27日、帰京。29日、国際関係研究会に出席。

4月5日、国際関係研究会例会に出席(太田三郎談話)。10日、日本外交史研究会(信夫淳平講演)に出席。24日、東京発、翌25日、香掛に到着。

5月2日、軽井沢に赴く。4日、松本に赴く。12日、帰京。21日、築地の聖ルカ病院で肺炎のため急逝。

年譜 注

1 清沢は、青年時代の読書について、つぎのように語っている。

「青年時代に私が愛読したのは内村鑑三氏と木下尚江氏でした。内村氏に対しては父のやうな厳格さを以て教へられましたし木下氏からは火のやうな情熱を感じました。木下氏のものはむさぼるやうに読んだものです。徳富健次郎氏の『思ひ出の記』も他の青年が得たと同じ感銘を得た。要するに当時は新しい事はキリスト教的であるといふことでした」(「読書より受けた青年時代の感激」『青年』19-9、1934年9月1日、17頁)。

また、「徳富健次郎氏の兄弟」(「社会時評」『現代』8-11、1927年11月1日)93頁では、蘆花の筆になつたものは何でも読み、『思出の記』(1900年刊)や『順礼紀行』(1906年刊)などは一種の信仰を以て何回となく耽読したと記している。

2 「タコマ教会会計報告」『北米教報』1911年1月15日、12頁。

3 清沢洵「故国より」『羅府新報』1928年7月8日。

4 「文壇の人 信濃太郎先生」『日米評論』4-138、1911年11月12日、第3面。記事によると「目下北米時事タコマ支社主任なるが其余暇を以て学校に通ひ恒に研鑽修行を怠らず、先生尚ほ弱冠にして一見白面の一書生なるが如きも、其筆を執るや縦論横説微を穿ち細に入る処宛乎として老成大家の如し、新進文士として尤も多望なる将来を有する者先生の如きは蓋し罕[まれ]也、請ふ小成に安んぜず所謂晩成を期し以て向上邁往せんことを」。

橋川編「仮年譜」では、タコマ時代の修学について、タコマ・ハイスクールに学び、のちにウィットウォース・カレッジ(Whitworth College)で政治・経済学を修めるといい、ワシントン州立大学(University of Washington)も聴講したという。ちなみに、ウィットウォース・カレッジは、長老派教会に所属するキリスト教系の私立大学で、1899~1914年まではタコマにあった(のちスポケーンに移転)。

5 清沢洵「米国選挙戦を観る」『太陽』33-1、1927年1月1日、119~120頁。

6 「信濃太郎氏來市」[雑報]『中央日報』1912年12月21日、第3面。

7 清沢洵「船中日記」(伊藤一男『北米百年桜 続』(小沢武雄刊、1973年)所収41~49頁)。

-
- 8 清沢冽「入社辞」『新世界』1914年10月28日。
 - 9 「故国記者招聘協議」『新世界』1915年7月15日、第3面。協議・決議者として『新世界』紙では清沢の名がみえないが、同決議を掲載した「故国新聞記者十名招待の議」(『日米[the Japanese American News]』1915年7月15日、第3面)、「桑港通信(七月十五日)」(『羅府新報』1915年7月17日、第7面)では清沢の名がある。
 - 10 「サクラメント(十六日)」中の「往来」『日米[the Japanese American News]』1916年5月17日、第6面。
 - 11 「サクラメント(十八日)」中の「往来」『日米[the Japanese American News]』1916年5月19日、第6面。
 - 12 「スタクトン(二十日)」中の「往来」『日米[the Japanese American News]』1916年5月21日、第7面。
「フレスノ(廿三日)」中の「清沢記者歓迎会」『日米[the Japanese American News]』1916年5月25日、第5面。
 - 14 「ロスアンゼルス(廿七日)」中の「清沢記者の来羅」『日米[the Japanese American News]』1916年5月29日、第5面。
 - 15 「清沢記者旅行」『新世界』1917年10月20日、第2面。
 - 16 「サクラメント(二十七日)」中の「来往」『新世界』1918年1月30日、第6面
 - 17 「清沢記者帰国」(『新世界』1918年7月23日)は、以下の様に伝えている。「本紙に健筆を振り居たる清沢冽氏は事故の爲め一時帰国する事となり来る三十一日出帆の天洋丸に乗込む筈なるが帰国中と雖も本紙の爲に通信其他万事の爲に努力せらる由にて用務片付次第再び帰米する方針なりと」
 - 18 「清沢氏送別会」『新世界』1918年7月28日。
 - 19 「清沢氏帰国」『新世界』1918年7月31日。
 - 20 井口喜源治「備忘録・第一」
 - 21 清沢が入社した頃の事業見通しについて、菅川商会主人菅川清は、米国の生糸需要は日一日に増加しているとし「生糸の販路は前途益々有望」と語っている(「生糸の販路は前途益々有望ならん」『新世界』1919年1月20日、第2面)。清沢自身も本気で実業家を志していたようであるが、給与増額を要求して解雇されたという(清沢冽「名士・新婚當時の月給と家賃」『モダン日本』6-6、1935年6月1日)。
 - 22 「波斯丸の船客」『新世界』1919年4月4日、「清沢氏渡米」『新世界』1919年4月5日。
 - 23 「清沢氏の消息」『日米[the Japanese American News]』1919年4月18日。
 - 24 「ロスアンゼルス(二十五日)」中の「清沢氏の来羅」『日米[the Japanese American News]』1919年5月27日。
 - 25 「ロスアンゼルス(卅一日)」中の「清澤氏の帰北」『日米[the Japanese American News]』1919年6月2日。
 - 26 「太田総領事本社々員を送還せんとする乎 速達郵便を以て送られた旅券査証の通牒 其意は何ぞ 総領事答へず 脅迫か? 挑戦か? 官権の濫用」『新世界』1919年8月6日、「官権を濫用したる太田総領事 旅券査証事件の内容 総領事よりは依然何等説明無し 其目的を考察して斯の如し」『新世界』8月7日、「速達で請求し乍ら旅券は不用なる乎 脅迫なる事愈明瞭也 公人としての太田総領事」『新世界』8月8日。
新聞『日米』では、無署名であるが、清沢に同道して総領事館に赴いた川島天涯であろう、「不可思議なる公文の通牒」(1919年8月6日)で、この間の経緯を報じている。
 - 27 新世界記者大澤霞水「領事の態度を難ず 頑迷か無智か其愚や及ぶ可らず」『新世界』1919年8月6~9日。真名子秀山(王府新世界支社主任)「太田総領事に呈す 黒手組以上の脅迫也」『新世界』1919年8月7、8日。新世界編輯局古屋敏恵「総領事に御尋ねす」『新世界』1919年8月8、9日。

-
- 28 清沢洌「旅券査証事件の筆を措くに当り」『新世界』1919年8月9日、「公式通牒事件 牛島氏が仲裁 一先づ落着」『日米[the Japanese American News]』1919年8月9日、「官吏として大恥辱也 太田総領事の失態 送還問題仲裁で落着せり」『布哇報知』1919年8月23日。
- 29 「清沢氏コルサ行」『新世界』1919年8月24日、第3面。
- 30 一記者「飛行機で鳥追ひ黄金の秋を前に鼻息の荒いコルサの米作」『新世界』1919年8月26日、第2面。
- 31 「これや丸便の寄港者」『日布時事』1919年10月20日、第2面、「他人の話を咀嚼する下準備に歐米を漫遊した後藤男の温情主義 これや丸船客貨物を満載して出帆」『新世界』1919年10月28日、第2面。因みに、20日付『日布時事』では「清沢洌(輸出入商元新世界記者)」とあり、28日付『新世界』では「本社客員清沢洌」とある。
- 32 清沢洌「組織的の排日運動開始」[談]『布哇報知』1919年11月4日、第1面。
- 33 清沢洌「軍籍に入る光栄の記」『新世界』1920年7月26日。
- 34 「記者名鑑」(『新聞及新聞記者』2-9、大正10年10月1日)127頁。
- 35 「清沢通信員」署名の「外務省加州同胞引上を否認 日本の米人歓迎と日米親善意向」(『新世界』1920年10月2日)の文末に9月3日とある。
- 36 清沢洌「軍隊気質 二等卒になつて 信州の山奥から」『新世界』1921年1月12日。
- 37 「清沢氏除隊」『新世界』1921年2月9日
- 38 「記者名鑑」(『新聞及新聞記者』2-9、大正10年10月1日)127頁。
- 39 「大正十一年版日本記者年鑑」(『新聞及新聞記者』3-5、大正11年6月30日)56頁。
ただし、同誌84頁の記者名鑑、『新聞及新聞記者』2-9、大正10年10月1日(33、127頁)では「外報部」とある。
中外商業新報社時代の勤務状態について、「十年ひと昔」(『若草』11-10、1935年10月1日)181頁では、「元来の仕事は外国電報を取扱ふことですが、それは一切整理部でやつてくれ、僕は外国の新聞や雑誌を読むことを日課にしてみました。今までの中、一番勉強が出来た時でした」と記している。
- 40 清沢洌『世界再分割時代』5~10頁、「病床のヨツフェ氏 取次で大に語る」『中外商業新報』1923年2月1日。
- 41 在日本新世界通信員「人種平等期成会 東京に発会式開催さる」『新世界』1923年5月17日。
- 42 清沢洌「母と妻と子と妹を一時に亡ぶ記」『新世界』10月25、26、28日~11月1日。
- 43 「各社罹災社員立退先」『新聞及新聞記者』4-10、1923年11月15日、66頁。
- 44 『日本経済新聞九十年史』(日本経済新聞社、1966年)508頁では、大正時代は通報部と称し、昭和2年2月に外報部と改めた。部長の発令はなく事実上の主宰とされ、1923年9月27日~1927年2月14日まで在任したと記す。
『日本新聞年鑑大正十三年』(1924年7月10日)掲載の「職別全社員表」によると1924年6月現在では「編集局」勤務(9頁)、「名鑑」によると「外報部」所属(96頁)、1925年6月現在で「外報部長」(「職別全社員表」『日本新聞年鑑大正十四年』1925年8月28日、70頁)とある。
ただし、「中外商業新報外報部長」の署名を確認できる最も早い寄稿文は、清沢洌「在米同胞は其子弟を米国で教育せよ」(『日布時事』1923年8月12日)である。
- 45 「次代同胞の市民権と添田博士の意見 移民協会で外交軟弱を非難す」『新世界』1924年1月23日
- 46 清沢洌「日本より」『新世界』1924年3月26日。
- 47 「東京だより 軍艦三笠と日米倶楽部」『日米[the Japanese American News]』1924年3月22日。
- 48 清沢洌「生れ故郷の信州に来て」『新世界』1924年5月5日。

-
- 49 岡谷に於ける経済講演会 本社主催『中外商業新報』1924年5月25日。
 - 50 「前橋市の講演会盛況 本社の主催」『中外商業新報』1924年6月16日。
 - 51 以下、視察旅程は、『中外商業新報』掲載の一連の視察報告から作成。
 - 52 清沢生「北京で問題の太田参事官と矢田総領事」[「満鮮遊記」]『新世界』1924年9月4日。
 - 53 「本社主催の経済講演会」『中外商業新報』1924年11月25日。
 - 54 「本社後援 豊橋講演 聴衆一千余名」『中外商業新報』1925年2月6日。
 - 55 「本社主催 名古屋講演 聴衆二千余名」『中外商業新報』1925年2月7日。
 - 56 「大山さんを迎へて水いらずの歓迎会」『日米[the Japanese American News]』1925年3月27日、第3面。
 - 57 「経済講演会」『中外商業新報』1925年5月8日。信濃太郎「足袋の名所」『中外商業新報』1925年5月12日
 - 58 「六月中新入会員」『国際知識』5-8、1925年8月1日、127頁。記事には「中外商業新報社外事部清沢淵」とある。
 - 59 「鮮満シベリアへ 視察団出発す」『中外商業新報』1925年9月5日。
 - 60 清沢淵「視察団同伴記 釜山から京城へ」1925年9月12日、「京城より」1925年9月13、14日、「視察団同伴記 京城より平壤へ」1925年9月18日、ほか。
 - 61 清沢淵「米国の農業よ満洲へ行け 太田公使が演説」『新世界』1925年11月6日。「東京便り 日米倶楽部」『日米[the Japanese American News]』1925年11月1日。清沢淵「満洲シベリアから帰つた歓迎宴での挨拶」『雄弁』17-1、1926年1月1日、406頁。
 - 62 「けふの放送」『東京朝日新聞』1926年2月7日、清沢淵「戦争根だやし決して不可能ではない」[ラジオ放送「国際講話 戦争と平和」]、掲載紙未詳、1926年2月7日[SB貼付]、清沢淵「平和主義の高唱」『国際知識』6-5、1926年5月1日。
 - 63 『東京朝日新聞』1926年5月7日、第2面の広告。
 - 64 『国際知識』6-7、1926年7月1日、142頁。
 - 65 『国際知識』6-7、1926年7月1日、150頁。
 - 66 『アサヒグラフ』6-26、1926年6月23日、6頁。
 - 67 『国際知識』6-12、1926年12月1日、121頁。
 - 68 『国際知識』7-2、1927年2月1日、116頁。
 - 69 「ラヂオ」欄『東京朝日新聞』1926年12月11日。
 - 70 『日本経済新聞九十年史』（日本経済新聞社、1966年）508頁では、清沢の外報部長辞任は1927年2月14日である。また、清沢淵「左団次と泥棒と警察と」（『法律春秋』2-3、1927年3月1日）では、清沢の所属が「東朝新聞」になっている。同じく「新聞教育に関する諸名家の意見感想」に寄せた一文では「東京朝日計画部」とある（『新聞及新聞記者』8-5(1927年4月1日、40頁)。
 - 71 『国際知識』7-3、1927年3月1日、56頁。
 - 72 『国際知識』7-5、1927年5月1日、152頁。
 - 73 『国際知識』7-5、1927年5月1日、153頁。
 - 74 『国際知識』7-7、1927年2月1日、142頁。
 - 75 「日本の政党政治の将来—政治座談会—」『創造日本』1-4、1927年7月1日。
 - 76 『国際知識』7-8、1927年8月1日、131頁。
 - 77 『東京朝日新聞』1927年11月6日、11面。
 - 78 『国際知識』8-1、1928年1月1日、141頁。

-
- 79 清沢冽「芸者亡国論」(『現代』9-6、1928年6月1日)67頁。
- 80 『国際知識』8-7、1928年7月1日、129頁。
- 81 『国際知識』8-8、1928年8月1日、104頁。
- 82 『国際知識』8-12、1928年12月1日、132頁。
- 83 橋川編「仮年譜」890頁では、1929年8月27日に「清沢の提案で二七会が発足」とあるが、吉野作造日記(『吉野作造選集 第15巻』岩波書店、1996年)91頁では、1928年10月27日の記事に「二七日会」出席とあり、以後、同会(於築地芳蘭亭)の記事が頻出する。
- 84 「三宅雪嶺先生を繞りて中心人物に就ての座談会」『実業之世界』26-3、1929年3月1日。
- 85 「ラヂオ」欄『東京朝日新聞』1929年3月4日、第4面。
- 86 「ラヂオ」欄『東京朝日新聞』1929年3月15日、第9面。
- 87 『やまと新聞』(昭和4年5月13日)は、朝刊1面トップに、津久井龍雄「東京朝日新聞記者清沢某の不逞新著『自由日本を漁る』に就て 国体冒涇の言辞乱発」を掲げ、引き続き、14、15日に「果然重大化せる朝日記者不敬問題」を掲げ、朝日新聞の攻撃を始めた。これに対して、清沢は同月16日、「批難する人に答へて」を同紙に寄せて反論した。清沢の反論に対して『やまと新聞』は、17日、津久井龍雄が「反駁者を駁す」で攻撃、18日には社説「自由主義者と国家」のほか、「朝日記者不敬問題批判」を掲げて攻撃した。その後も、同月29日に矢部周「東朝幹部に与ふる公開状」、30日に吉野真七「軍部当局に一言一東朝記者不逞事件に関し」を掲げ、東京朝日新聞攻撃のキャンペーンを繰り広げた。
- 88 伊藤一男「野に咲いたバラ・清沢冽」(『続・北米百年桜』1972年)259～260頁。朝日新聞社人事部記録によるとされている。
吉野作造は清沢の朝日退社の意向を1929年6月27日の二七会で知る(吉野作造日記、前掲書142頁)。「鈴木文治氏と清沢冽氏 同船で帰国」(『日布時事』1930年10月15日、第5面)では「筆禍を買って辞任」と伝える。
- 89 清沢冽「漫然とお祝ひの祝辞」『羅府新報』1929年10月1日。
- 90 「清沢冽の渡米 その送別会」『日米[the Japanese American News]』1929年8月24日、第2面。
- 91 「清沢氏通信 二十三日沙都に到着」『新世界』1929年8月27日、第3面。
- 92 『新自由主義』2-9、1929年9月1日、43頁。
- 93 「シヤトル」欄の「清沢氏を中心に漫談の夕 趣味の会が主催で」『新世界』1929年9月4日、第6面、「清沢氏を中心に漫談の夕 趣味の会が主催で」『日米[the Japanese American News]』1929年9月4日、第6面。
- 94 「清沢冽氏二世と懇談」『新世界』1929年9月9日、第7面。「沙都通信」欄の「日本よりも米国 二世の意志はこれ 昨夜懇談会に出た清沢氏二世は確かなものだ」と語る『羅府新報』1929年9月13日、第7面。
- 95 「シヤトル」欄の「清沢冽氏母国を語る 今晚の講演会」『日米[the Japanese American News]』1929年9月14日、第7面。「シヤトル(十一日)」欄の「緊張しきつた聴衆六百余 清沢氏の講演」同1929年9月15日、第6面
- 96 「本社主催清沢氏講演会 去土曜夜テラー国校にて 農村日本と米国との比較」『北米時事』1929年9月16日、「マルキシズムからアメリカニズムへ」『昭和日本の遠望』と題し清沢冽氏の講演『北米時事』1929年9月17日[以上、SB貼付記事]。
- 97 「オープンに於ける日米人の親善関係 清沢氏を歓迎する午餐会へ市長はじめ有力者の出席」『北米時事』1929年9月21日[SB貼付記事]。
- 98 「清沢氏の来市と講演会 本社有馬氏及び山口氏同伴」『北米時事』1929年9月22日、「成功に終わった清

-
- 沢氏講演(ヤキマ廿三日)『北米時事』1929年9月24日[以上、SB貼付記事]、「沙都通信」欄の「清沢氏の講演 昨夜ス市で盛会 日曜はヤキマとワトバで ス市では青年会の実力」『羅府新報』1929年9月29日、第7面。
- 99 「婦人会にて清沢氏講演」『北米時事』1929年10月4日[SB貼付記事]。
- 100 「清沢冽氏一昨夜来桑」『新世界』1929年10月31日。
- 101 「清沢冽氏歓迎会盛会 出席者四十名」『日米[the Japanese American News]』1929年11月9日。
- 102 「日本はゆき詰つてゐる それで未来がある わかり易く熱の籠つた清沢冽氏の講演」『新世界』1929年11月16日。
- 103 「清沢氏の講演 十四日桑港以下四カ所」『日米[the Japanese American News]』1929年11月15日。「アイルトン(十四日)」の「思想界の新人清沢氏講演会」『日米[the Japanese American News]』1929年11月17日。「フレズノ(十七日)」の「二時間半に亘る日米の比較論評清沢氏の大講演」、「スタクトン(十七日)」の「現代は日本国民の試金石の時代 朝日座に於ける清沢氏の講演の要旨」、「ウオナツグロープ(十八日)」の「清沢氏講演会」『日米[the Japanese American News]』1929年11月19日。「フレズノ支社十七日」の「三百の聴衆清沢氏の熱弁に傾聴」『新世界』1929年11月19日、「スタクトン十六日」の「清沢冽氏の講演会盛況」『新世界』1929年11月19日。
- 104 「マウンテンビュー(廿一日)」の「清沢冽氏講演会 廿五日夜」『日米[the Japanese American News]』1929年11月23日。
- 105 「倫敦の軍縮会議へ個人的に臨む清沢氏 市俄古で代表と落ち合ふ」『新世界』1929年11月30日。
- 106 「清沢冽氏の打電と通信」『日米[the Japanese American News]』1929年12月1日、第3面。
- 107 「日本評論界の新人清沢冽氏「転換期の日本」に就て語る」『羅府新報』1929年12月9日。
- 108 「日本経済新聞社年年表」(『日本経済新聞社八十年史』日本経済新聞社編・刊、1956年)頁25。
- 109 清沢冽[特電]「上院議員ボラー氏と移民問題を語る 日米国交改善のためならば如何なる運動にも賛成する」『日米[the Japanese American News]』1930年5月27日。同「アルバートジョンソン氏と語る(二)」『新世界』1930年6月1日。
- 110 「新人清沢氏の講演会 倫敦会議土産話」『日米[the Japanese American News]』1930年6月30日。
- 111 「清沢氏来羅暫く滞在」『新世界』1930年6月24日。
- 112 「軍縮会議の表裏を語る清沢氏講演会」『羅府新報』1930年6月27日。
- 113 「東洋大学の講師に 清沢冽氏殖民政策を」『日米[the Japanese American News]』1930年7月1日。
- 114 「近来にない盛会だつた本社主催大講演会」『日米[the Japanese American News]』1930年7月4日。
- 115 「聴衆四百余名清沢氏講演会盛会」『日米[the Japanese American News]』1930年7月25日。
- 116 「講談より面白い清沢氏講演会」『日米[the Japanese American News]』1930年7月26日。
- 117 「不老林で清沢氏講演」『日米[the Japanese American News]』1930年7月28日。
- 118 「清沢氏の倫敦会議縦横談 土曜夜フレズノ 日曜夜ハンフオード」『日米[the Japanese American News]』1930年7月26日、「清沢氏の二講演フレズノとハンフオード」『日米[the Japanese American News]』1930年7月29日。
- 119 「バイセリア 清沢冽氏講演会」『日米[the Japanese American News]』1930年7月26日。「清沢氏講演 本タバイセリアで」同7月30日。
- 120 「ローダイ便り 清沢氏講演会」『日米[the Japanese American News]』1930年7月31日。
- 121 「清沢氏講演会開催 卅日夜仏教会ホールで」『日米[the Japanese American News]』1930年7月26日。「清沢氏の講演会」同7月29日。
- 122 「盛会なりし軍縮講演会 日米支社主催」『日米[the Japanese American News]』1930年8月3日。

-
- 123 「清沢氏講演会 八月一日」『日米[the Japanese American News]』1930年7月29日。「清沢氏の講演」同8月5日。
- 124 「空前の大成功を収めし清沢の講演会」『日米[the Japanese American News]』1930年8月5日。「盛会であつた清沢氏講演会」『新世界』1930年8月6日。
- 125 「清沢氏講演会十六日夜」『日米[the Japanese American News]』1930年8月16日。「講演の盛況」『日米[the Japanese American News]』1930年8月20日。
- 126 「清沢冽氏ニケ月振に皈羅 当分当地滞在」『新世界』1930年8月21日。
- 127 「清澤氏の講演会盛況 1930年8月31日。
- 128 「ノーオク廿五日 青年会主催の清沢氏講演 軍縮問題に就て」『羅府新報』1930年9月27日、「ノーオク 清沢氏講演会盛会」(『日米[the Japanese American News]』1930年10月5日)は、4日の夜に講演とあるが、同日午後には出帆しているので、記事が伝える講演日時には誤記がある。
- 129 「盛会であつた清沢冽氏の講演会」『日米[the Japanese American News]』1930年10月3日。
- 130 「清沢氏帰朝に際し米同胞の批判を」『新世界』1930年10月2日、「盛会な講演会 清澤氏獅子吼す」『新世界』1930年10月4日。
- 131 「リオデジャネイロ丸」『日米[the Japanese American News]』1930年10月5日。「鈴木文治氏と清沢冽氏 同船で帰国」『日布時事』1930年10月15日、第5面。
- 132 『国際知識』11-2、1931年2月1日、104頁。
- 133 清沢冽「日本雑信(一)」『羅府新報』1931年3月3日。
- 134 清沢冽「信州より 片倉温泉にて」『羅府新報』1931年3月5日。
- 135 清沢冽「日本雑信(二)」『羅府新報』1931年3月4日。
- 136 「演説会風景座談会」『雄弁』22-5、1931年5月1日。
- 137 「東京だより 米国関係五氏の送迎会 清沢翁駒井等の諸氏」『日米[the Japanese American News]』1931年5月2、3日。
- 138 「清沢氏渡米」『新世界』1931年4月29日。
- 139 「飛行機の先走りに清沢氏着沙 すぐにアラスカ方面へ」『日米[the Japanese American News]』1931年5月4日。
- 140 「清沢氏帰沙」『新世界』1931年5月20日。
- 141 「清沢氏来桑」『新世界』1931年5月28日。
- 142 「『日本を語る』座談会」『羅府新報』1931年6月19~21、23~28、30日~7月4、7~12日。
- 143 「清澤氏一月来桑」『日米[the Japanese American News]』1931年12月6日。
- 144 鶴見祐輔「日記」1932年2月18日記事(国立国会図書館憲政資料室所蔵鶴見祐輔文書)。
- 145 「名越大尉の葬儀に各国名士の弔電 数千の在留民参列して空の勇士の最期を悼む」〔在紐育清澤冽氏特報〕『新世界』1932年4月5日、第3面。
- 146 「太平洋横断の吉原氏寄羅」『新世界』1931年4月29日
- 147 「緊張した晩餐会 命を的にした飛行家の為に」『日米[the Japanese American News]』1932年5月16日。
- 148 巴里を語るの会『日米[the Japanese American News]』1932年5月24日。
- 149 「皆さんに宜敷清沢氏帰朝」『日米[the Japanese American News]』1932年7月16日。
- 150 「我が選手団輸送の任を果し龍田丸珍客を乗せて帰る」『日布時事』1932年7月19日。
- 151 「清沢氏より帰朝便り」『日米[the Japanese American News]』1932年8月28日、第3面。
- 152 1932年8月7日付牧野伸顕宛清沢冽書簡(国立国会図書館憲政資料室所蔵「牧野伸顕文書」)

-
- 153 吉野作造日記、前掲書 412 頁。
「米国からの帰朝歓迎会に出てくれて一緒に銀座まで歩いた」(清沢冽「逝ける吉野作造氏」『報知新聞』1933 年 3 月 23 日)という。
- 154 『旬刊講演集』306、1932 年 11 月 20 日。
- 155 「日米問題講演会」『報知新聞』1932 年 11 月 9 日。
- 156 「外国から日本を見る」『新潮』29-12、1932 年 12 月 1 日。
- 157 橋川編「仮年譜」895 頁では、1930 年に論説委員に就任、以後、1939 年 1 月に辞任するまで、幹部として事業計画に参加、論説などを執筆とある。
論説委員の就任は 1932 年頃と思われる。『日本新聞年鑑』(新聞研究所)によると、1932 年 12 月 10 日時点で報知新聞社編集局嘱託(「職別全社員表」『日本新聞年鑑 昭和八年』84 頁)、以後、1938 年 12 月 5 日時点までは同職にあった(「職別全社員表」『日本新聞年鑑 昭和十四年』117 頁)。なお、清沢冽「スクラップブック(新聞 1930 年 2 月 11 日～1933 年 11 月 3 日)」には、1932 年 10 月 7 日～11 月 18 日まで無署名論説 7 篇が貼付されている。
- 158 清沢冽「米国新大統領ルーズヴェルトと其政策」『婦選』7-2、1933 年 2 月 1 日。
- 159 「第七回本部座談会抄録」『新自由主義』6-4、1933 年 4 月 1 日。
- 160 清沢冽「吉野作造博士逝去」(「社会時評」『雄弁』24-5、1933 年 5 月 1 日)128 頁。
- 161 「満洲国を聴く」[3 月 30 日報知新聞社主催「満洲国を聞くの会」]『報知新聞』1933 年 4 月 11～16 日。
- 162 「非常時後継内閣座談会」『中央公論』48-5、1933 年 5 月 1 日。
- 163 「婦人の知識向上の為に家庭管理大学の開講」『報知新聞』1933 年 3 月 9 日。
- 164 「外国新聞と日本新聞の実際批判座談会」『日刊新聞時代』1933 年 4 月 19、20 日。
- 165 『国際知識』13-6、1933 年 6 月 1 日、158 頁。清沢冽『混迷時代の生活態度』310～312 頁。
- 166 「日米親善問題座談会」『東洋経済新報』1555、1933 年 6 月 24 日。
- 167 『芦田均日記 第 3 卷 一九二六年～一九三六年』(柏書房、2012 年)605 頁。
- 168 「愛国及び愛人類を語る」『婦人之友』27-10、1934 年 10 月 1 日。
- 169 「座談会・『資本主義は倒壊するか?』」『東洋経済新報』1581、1934 年 1 月 6 日。
- 170 「座談会 国民外交を何うする」『婦人之友』28-2、1934 年 2 月 1 日。
- 171 林健太郎「私の学生時代」(『日本経済新聞』1972 年 11 月 13 日)、『赤門うちそと』(読売新聞社、1975 年)収録 116 頁。
- 172 「職業問題対策座談会 採用者の希望と就職者の心得を語る」『東洋経済新報』1588、1934 年 2 月 24 日。
- 173 『国際知識』14-5、1934 年 5 月 1 日、158 頁。
- 174 清沢冽「現代ジャーナリズムの批判」『講演』259、1934 年 7 月 10 日。
- 175 『芦田均日記 第 3 卷 一九二六年～一九三六年』(柏書房、2012 年)633 頁。
- 176 「“岡田内閣”座談会 其の成立の意味と国民の要望を語る」『東洋経済新報』1609、1934 年 7 月 14 日。
- 177 清沢冽「日米学生大会を観る」『北米時事』1934 年 8 月 11、14～17 日。
- 178 清沢冽「講演旅行より」『北米時事』1934 年 8 月 30、31 日、2 頁。
- 179 北岡伸一『清沢冽 増補版』(中央公論新社、2004 年)132～133 頁。
- 180 清沢冽「社会時評」『雄弁』25-11、1934 年 11 月 1 日、139 頁。
- 181 「座談会 神経質」『婦人之友』28-11、1934 年 11 月 1 日。
- 182 「臨時議会の諸問題と財政経済の前進 座談会」『経済情報』9-23、1934 年 11 月 1 日。
- 183 「門戸開放座談会 日満経済プロットとの関係」『東洋経済新報』1628、1934 年 11 月 17 日。
- 184 「アメリカ最近の傾向」『文明協会ニュース』[100]、1935 年 1 月 10 日。

-
- 185 「貧困児童とその教育を語る座談会」『児童』2-1、1935年1月1日。
- 186 「高千穂丸入港」『台湾日日新報』1935年1月20日。
- 187 清沢冽「南支那を巡りて」『報知新聞』1935年2月26日～3月5日。
- 188 「『今日及び明日』を語る夕」『経済往来』10-4、1935年4月1日。
- 189 清沢冽「支那の対日真意を打診する」『講演』285、1935年3月30日。
- 190 清沢冽「外交問題について 広田外相との一問一答」『婦人之友』29-5、1935年5月1日。
- 191 「大学検討座談会」『文芸春秋』13-5、1935年5月1日。
- 192 清沢冽「自由主義と其批判—自由主義の立場より—」『講演』295、1935年7月10日。
- 193 『国際知識』15-7、1935年7月1日、154頁。
- 194 「けふの放送番組」『東京朝日新聞』1935年7月2日。
- 195 「今週の経済界」『東洋経済新報』1665、1935年8月3日。
- 196 『国際知識』15-9、1935年9月1日、166～167頁。
- 197 『国際知識』15-9、1935年9月1日、167頁。
- 198 「各国とソ連邦の関係」『月刊ロシヤ』1-4、1935年10月1日。
- 199 「今週の経済界」『東洋経済新報』1672、1935年9月21日。
- 200 「宇垣外交に就て—外交常識の問題—[10月5日第6回ジャーナリスト講演会(於三田新館33番教室)、掲載紙未詳、1935年10月10日。
- 201 「座談会 自由主義を語る」『東洋経済新報』1678、1935年10月26日。
- 202 「深井総裁に話を訊く会」『経済知識』15-1、1936年1月1日。
- 203 「座談会 良国民となるために 大国民となるために」『婦人之友』30-1、1936年1月1日。
- 204 「軍縮会議脱退後の形勢と其の対策を語る」『東洋経済新報』1690、1936年1月25日。
- 205 『国際知識』16-2、1936年2月1日、153頁。
- 206 「総選挙に臨む 五政党の政策批判座談会」『経済情報』11-4、1936年2月1日。
- 207 『芦田均日記 第3巻 一九二六年～一九三六年』(柏書房、2012年)761～762頁。
- 208 「文化と暴力」『文芸懇話会』1-4、1936年4月1日。
- 209 「新国是の提唱座談会」『経済情報』11-8、1935年3月21日[3月10日於神奈川県丸子・丸子園。
- 210 『国際知識』16-5、1936年5月1日、153頁。清沢冽「アメリカ最近の情勢」『講演時報』13-45、1936年4月5日。
- 211 「官僚の抬頭を批判する座談会」『文芸春秋』14-5、1935年5月1日。
- 212 「座談会 新しき世代の家庭教育を語る」『婦人之友』30-6、1935年6月1日。
- 213 「植民地再分割と日本の前途」『講演』329、1935年6月20日。
- 214 「特別議會を通じて見た議會政治と庶政—新批判特別議會批判討論座談会」『講演』330、1935年6月30日
- 215 『国際知識』16-9、1936年9月1日、153頁。
- 216 「日本の非常時を裏から見た座談会」『大陸日報』1937年1月1、4～9日。
- 217 「男の立場から恋愛と結婚を語る座談会」『主婦之友』21-1、1937年1月1日。
- 218 「西安事変と支那の前途 我對支政策の轉換を語る」『東洋経済新報』1740、1937年1月21日。
- 219 「曖昧」を語る」『婦人之友』31-2、1937年2月1日。
- 220 「時局批判座談会 政変の意義と時局認識」『東洋経済新報』1746、1937年2月13日。
- 221 「戦争と軍備を語る(座談会)」『改造』19-4、1937年4月1日。
- 222 「東京を語る座談会」『婦人之友』31-5、1937年5月1日。

-
- 223 「民族主義と無産運動」『明日』8-5、1937年5月1日。
- 224 「『次期政権』座談会」『中央公論』52-6、1937年6月1日。
- 225 「『フアツシヨは強いかわいのか』大座談会」『世界知識』10-7、1937年7月1日。
- 226 「近衛内閣の成立を語る 成立の経過・意義及び其の前途」『東洋経済新報』1764、1937年6月12日。
- 227 「第二次世界大戦は必至か？」『いのち』5-10、1937年10月1日[8月26日於芝・春岱寮]。
- 228 『国際知識及び評論』17-10、1937年10月1日、187頁。
- 229 『芦田均日記 第4巻 一九三七年～一九四五年』(柏書房、2012年)57頁。
- 230 『東京朝日新聞』1937年9月21、25日。
- 231 「自由評論家清沢氏 事変を斯く観る 渡英の途次秩父丸で寄港」『日布時事』1937年10月2日、第8面。
- 232 「日本評論界大立者国際ペン倶楽部の日本代表清沢氏昨日入港の秩父丸で来桑す 夜はり教会で大講演会」『日米[the Japanese American News]』1937年10月9日。
- 233 「清沢氏中心に日英字新聞の記者懇談 極東問題に意見の交換」『新世界朝日新聞』1937年10月11日。
- 234 「清沢氏の時局講演 日支事変を繞つて 事変の真相より国際情勢に及ぶ」『羅府新報』1937年10月12、16日。
- 235 清沢洌「国際ペン倶楽部苦戦記」『中央公論』53-1、1938年1月1日(『現代世界通信』85～105頁)、参照。
- 236 清沢洌「ブラツセル会議傍聴記」『東洋経済新報』1794、1938年1月8日(『現代世界通信』118～127頁)、参照。
- 237 「成功を確信せねば調停に乗り出さぬ」[ベルリン 27日同盟発]『報知新聞[夕刊]』1937年11月29日。
- 238 “Anglo-Japanese Relations : A Plea for better understanding” *The Times*, Dec. 10, 1937.
- 239 『芦田均日記 第4巻 一九三七年～一九四五年』(柏書房、2012年)170頁。
- 240 清沢の投稿は、A. Morgan Young, “Japanese aims in China: Viscount Ishii’s speech”, *The Manchester Guardian*, Feb. 21, 1938 を批判したものである。
- 241 清沢の投稿は、Charles Rappoport, “The Moscow executions; Stalin and his victims composed”, *The Manchester Guardian*, March 31, 1938 を批判したものである。
- シャルル・ラポポールは、モスクワ裁判に抗議して『イズベスチヤ』のパリ通信員を辞しフランス共産党を脱党したコミュニストである。清沢の批判に対してラポポールは、以下の投稿で回答している。
- Charles Rappoport, “Foreign opinion of the term “Asiatic”; Why Russians use it in a bad sense”, *The Manchester Guardian*, April 14, 1938.
- 242 清沢洌「国際学術会議に列して」『報知新聞』1938年8月9～11日(『現代世界通信』106～117頁)。
- 243 「英独の相撲 体力第一主義に転換 清沢洌氏土産話」[談]『上海日報[夕刊]』1938年7月2日。
- 244 『東京朝日新聞』1938年7月5日。
- 245 『国際知識及び評論』18-8、1938年8月1日、169頁。
- 246 「世界の中に日本を見る 新帰朝の清沢洌氏を南沢に迎へて」『婦人之友』32-8、1938年8月1日。
- 247 清沢洌『欧米は日本を如何に観て居るか』日本外交協会、1938年7月。
- 248 『国際知識及び評論』18-10、1938年10月1日、185頁。
- 249 『国際知識及び評論』18-10、1938年10月1日、186頁。
- 250 『国際知識及び評論』18-10、1938年10月1日、187頁。
- 251 「東進独逸の今後を語る座談会」『東洋経済新報』1835、1938年10月8日。
- 252 『国際知識及び評論』18-11、1938年11月1日、165～166頁。

-
- 253 「ラヂオ」欄『東京朝日新聞』1938年10月3日。清沢洌「欧米婦人の印象」『ラヂオ講演講座』52、1938年10月25日。
- 254 「座談会 欧州劇の内幕を語る」『ダイヤモンド』26-30、1938年10月11日。
- 255 『国際知識及評論』18-12、1938年12月1日、185頁。
- 256 『国際知識及評論』18-12、1938年12月1日、185頁。
- 257 『石橋湛山全集』第15巻補訂版(東洋経済新報社、2011年)258頁。
- 258 清沢洌「支那事変と列強の動向」『東洋経済新報』1852、1939年2月4日。
- 259 記事「評論家協会結成」『朝日新聞』1938年12月2日。『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、1996年)441頁、三木清「評論家協会について—その仕事とその時局性」『読売新聞[夕刊]』1938年12月10日。
- 260 『国際知識及評論』19-1、1939年1月1日、168～169頁。
- 261 「『東亜に迫る世界の圧力』座談会」『文芸春秋』17-3、1939年2月1日。
- 262 「海外放送 十二月番組」『日布時事』1938年11月23日。
- 263 「熱海より」『北米時事』1939年2月2日。
- 264 『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、1996年)438頁。
- 265 「平沼内閣の革新的性格を吟味する」『東洋経済新報』1849、1939年1月14日。
- 266 『国際知識及評論』19-3、1939年3月1日、169頁。
- 267 清沢洌「我が時局観と其解決策」『旬刊講演集』524、1939年2月10日。
- 268 『国際知識及評論』19-4、1939年4月1日、167頁。
- 269 清沢洌「具体策を論議せよ 抽象論が示す頭脳と政策の貧困 議会に望む」(『中外商業新報』1939年2月20日)から、清沢洌「対敵思想戦の要—シンガポール陥落と攻撃政策—」(『中外商業新報』1942年2月23日)まで34篇を執筆。
- 270 『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、1996年)441頁。
- 271 「東亜新秩序建設座談会」『科学知識』19-4、1939年4月1日。
- 272 『国際知識及評論』19-4、1939年4月1日、169頁。
- 273 『国際知識及評論』19-5、1939年5月1日、186頁。
- 274 『国際知識及評論』19-5、1939年5月1日、187頁。
- 275 『国際知識及評論』19-5、1939年5月1日、187頁。
- 276 「(座談会)戦争の危機と独伊進出の今後を語る」『東洋経済新報』1865、1939年4月29日。
- 277 「『戦争にはまだならぬ なつたとしたら』座談会」『週刊朝日』35-23、1939年5月14日。
- 278 『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、1996年)439頁。
- 279 評論社版『暗黒日記』694頁。「日本文化研究の文学団体組織さる 学派学閥を越へて結成」『日米[the Japanese American News]』1939年5月10日、第2面。
- 280 『国際知識及評論』19-6、1939年6月1日、178頁。
- 281 清沢洌「無名の大教育家井口先生の生涯—わが少年時の記録—」(『雄弁』30-7、1939年7月1日)263頁。
- 282 「外国宣伝語る座談会」『読売新聞』1939年6月20日。
- 283 『国際知識及評論』19-8、1939年8月1日、163～164頁。
- 284 「対支政策を再検討す 座談会」『東洋経済新報』1876、1939年7月8日。
- 285 「欧米を一巡して」『秋田魁新報』1939年7月6～10日。
- 286 『国際知識及評論』19-8、1939年8月1日、164～165頁。

-
- 287 『石橋湛山全集』第15巻補訂版(東洋経済新報社、2011年)260頁。
- 288 「海外放送八月の番組」『日布時事』1939年7月22日。
- 289 『国際知識及評論』19-10、1939年10月1日、167頁。
- 290 『国際知識及評論』19-10、1939年10月1日、167～168頁。
- 291 清沢洌「第二次大戦と国際情勢」『講演』446、1939年9月20日。
- 292 「座談会 世界新情勢の中に立つ」『婦人之友』33-10、1939年10月1日。
- 293 「欧州大戦の表裏を語る座談会」『雄弁』30-11、1939年11月1日。
- 294 清沢洌「欧州大戦の動向と事変の收拾」『講演通信』441、1939年10月20日。
- 295 「座談会 外務省と日本外交」『中央公論』54-12、1939年11月1日。
- 296 「雨か?風か?暗雲低迷する日米関係を語る座談会」『大陸』2-12、1939年12月1日。『芦田均日記 第4巻 一九三七年～一九四五年』(柏書房、2012年)224頁。
- 297 『国際関係研究』1、1940年6月15日、6、165～167頁。
- 298 『国際知識及評論』20-1、1940年1月1日、164頁。
- 299 『石橋湛山全集』第15巻補訂版(東洋経済新報社、2011年)261頁
- 300 『国際関係研究』1、1940年6月15日、168頁。
- 301 『国際知識及評論』20-2、1940年2月1日、158頁。
- 302 清沢洌「最近のヨーロッパ戦争の状況に就いて」『丁酉倫理会倫理講演集』449、1940年3月1日。
- 303 北岡伸一「吉田茂と清沢洌—清沢洌宛書簡に見る外交官出身総理大臣の歴史意識」(『人間吉田茂』中央公論社、1991年)176、178頁。
- 304 『国際関係研究』1、1940年6月15日、168頁。
- 305 『石橋湛山全集』第15巻補訂版(東洋経済新報社、2011年)262頁。
- 306 『国際知識及評論』20-3、1940年3月1日、167頁。
- 307 「経済情勢と新内閣 座談会」『ダイヤモンド』28-4、1940年2月1日
- 308 「日本戦時外交談義」『実業之日本』43-4、1940年2月15日。
- 309 北岡伸一「吉田茂と清沢洌—清沢洌宛書簡に見る外交官出身総理大臣の歴史意識」(『人間吉田茂』中央公論社、1991年)179頁。
- 310 『国際関係研究』1、1940年6月15日、168頁。
- 311 『国際関係研究』1、1940年6月15日、169～170頁。
- 312 「座談会 新政権成立後の重要問題」『東洋経済新報』1916、1940年4月13日。
- 313 「座談会 『この頃の問題』を語る」『婦人之友』34-5、1940年5月1日。
- 314 『国際関係研究』1、1940年6月15日、170頁。
- 315 「対米政策を語る」『アメリカ』1-1、1940年5月15日。
- 316 『週刊朝日』37-25、1940年6月9日、6～10、37頁。
- 317 『国際知識及評論』20-7、1940年7月1日、195頁。
- 318 「座談会 欧州戦局の実状と今後の日本」『公論』3-4、1940年7月1日。
- 319 「激変する世界経済と統制経済の前途」『インダストリー』4-7、1940年7月1日。
- 320 「『近衛公と新党』を語る座談会」『実業之日本』43-14、1940年7月15日。
- 321 「興亜大学開講」『満州日日新聞』1940年8月1日、第5面。清沢洌「鮮・満を旅行して」『秋田魁新報』1940年8月12日、同「近衛内閣成立の経緯」(『婦人公論』25-9、1940年9月1日)174頁。
- 322 「彼が東洋の地歩は別荘みたいだよ 外交評論家清澤氏の痛論[談「今に吠え面搔くな恐々と虎の尾を踏む英国」]」『満州日日新聞』1940年8月6日、第7面。

-
- 323 「ロシヤファシストを語る 聴けロシアの声を 第四インターとは結ばず 清沢氏らとの会談『哈爾濱日日新聞』1940年8月15日[SB貼付]。
- 324 『国際知識及評論』20-11、1940年11月1日、158～159頁。
- 325 「国際新情勢と海洋国防国家(座談会)『公論』3-11、1940年11月1日。
- 326 『国際関係研究』2、1941年1月2日、226～227頁。
- 327 『国際関係研究』2、1941年1月2日、227頁。
- 328 『国際知識及評論』20-12、1940年12月1日、140頁。
- 329 「新体制と太平洋」[談]『名古屋新聞』1940年11月26日。
- 330 『国際関係研究』2、1941年1月2日、227頁。
- 331 「日米もし戦はゞ」『名古屋新聞』1941年1月1、2、4、5～9日。
- 332 『芦田均日記 第4巻 一九三七年～一九四五年』(柏書房、2012年)415頁。
- 333 「太平洋を繞る日・米・蘇関係鼎談会」『講演通信』492、1941年3月15日。
- 334 『国際知識及評論』21-4、1941年4月1日、145頁。
- 335 畑中繁雄『日本ファシズムの言論弾圧抄史』(高文研、1986年)87頁。
- 336 「欧州戦局と極東状況の見透し」『インダストリー』5-4、1941年4月1日。
- 337 『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、1996年)439頁。
- 338 『経済倶楽部講演』16、1941年6月28日、『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、1996年)439頁。
- 339 「和平か長期戦か 欧州戦争の見透し」『インダストリー』5-6、1941年6月1日。
- 340 『国際知識及評論』21-7、1941年7月1日、161～162頁。
- 341 『国際知識及評論』21-8、1941年8月1日、189頁。
- 342 「座談会 独ソ開戦の後に来るもの」『東洋経済新報』1978、1941年7月5日。
- 343 『国際知識及評論』21-10、1941年10月1日、139～140頁。
- 344 「独米危機を孕む世界動乱の展開」『インダストリー』5-10、1941年10月1日。
- 345 『国際知識及評論』21-12、1941年12月1日、152頁。
- 346 正宗白鳥『文壇五十年』(河出書房、1954年)115頁。
- 347 「日本語の海外進出について」『中央公論』57-6、1942年6月1日。
- 348 記事「楽観は禁物だ 清沢瀏氏世界の情勢を語る」『新潟日日新聞』1942年3月24日、第7面。
- 349 評論社版『暗黒日記』267頁。
- 350 『図書』83、1942年11月25日、62頁。
- 351 『外交評論』23-11、1943年11月1日、139頁。
- 352 『外交評論』23-11、1943年11月1日、139頁。
- 353 「書齋を出で」『日本新聞報』95～99、1944年2月19～29日。
- 354 『外交評論』24-4、1944年4月1日、62頁。
- 355 日記に対応する会は、『外交評論』24-4、1944年4月1日、62頁によると、3月19日の午餐談話会(第335回例回)に該当する。『外交評論』掲載記事の日付が誤記であろう。
- 356 Japonicus についての詳細は、拙稿「清澤瀏著作目録 付論 無署名およびペンネームによる執筆文について II 戦時下の無署名評論について 5. 『The Nippon Times』」、参照。
- 357 「座談会 『国民運動の指針』を語る」『東洋経済新報』2148、1944年11月11日。
- 358 「反枢軸国の戦後機構案を批判す」『大陸東洋経済』27、1944年12月28日。
- 359 『石橋湛山日記』(みすず書房、2001年)6頁。